

中川市の災害誌



36.6 梅雨前線豪雨

災害地概況図





都段のこころざりて去りし道か辺り
津しるはに咲くコスモスの花
戸枝 馨



復興碑 永久に鎮まり
冬かげりるう
知久 量斗

発刊のことば

中川村長 戸 枝 馨

雨に洗われた柿の実の真紅，草木の青さ，いずれも雨あとはその色を一しお鮮明にするものであります。これらの鮮明さにもまして思い出は新たに，あの36災の追憶がひしひしと胸に迫ってきます。一しゅんの中におこった大惨禍を，誰が予測したでありましょう。山を崩し田畑を埋め，道路，橋梁を流失せしめ人家を倒し，多くの尊い人命を奪い去りました。

その上，ただ一基の移住記念碑に，数々の悲しき思いを托して，一部落全戸が，村外へ移住するの止むなきに至った四徳部落のことなどを思えば，まことに感無量なるものがあります。

こうした中であって村の皆さんは，よく力を合わせ，よくはげまし合って努力をつづけ，加うるに，国や県をはじめ，各方面のあたたかい御同情とお力ぞえにより，3年有余を経た今日，復旧工事も，ほぼ完成の段階に至りましたことは，まことに感謝に堪えず厚く御礼を申しあげます。

ここに中川村の災害誌の発刊に当り，多くの犠牲者の冥福をお祈りし，復興の足がかりとして，ますます明るい郷土の建設と繁栄のために，一層の努力をいたしたいものと決意を新たにすると共に，皆様方の御健斗をお願いして御挨拶とします。

昭和39年秋日

目 次

表 紙 (濁流の中の四徳分校)

題 字 戸 枝 馨

表紙裏側 図 面

口 絵 写 真……………(四徳移住記念碑、小和田復興記念碑)

発刊のことば……………中川村長 戸 枝 馨

第1編 概 観…………… 3	1. 有線放送MHK……………22
1. あれから3年半…………… 3	2. 濁流の中の片桐有線……………23
2. 伊那谷災害の概要…………… 3	3. 中川・田島局の活躍……………24
(1) 気象と雨量…………… 3	4. 役場水害日誌抄録……………24
(2) 豪雨の道すじ…………… 4	5. 東中災害日誌抄録……………25
第2編 中川村災禍の概要……………12	6. 日刊新聞から転載……………25
1. 死者と重軽傷者……………12	7. 災害地に生きる……………29
2. 流失, 全壊等の住家数……………13	第5編 復興のすがた……………35
3. 土木, 耕地事業, 農耕地, 林野の被害……………13	1. 36災害による移住者……………35
4. 教育, 厚生, その他……………14	2. 災害移住記念碑……………37
5. 農産関係の被害……………14	3. 復興記念碑……………37
6. 公共団体等の被災……………15	4. 道路・橋梁・河川の復旧……………38
第3編 応急対策と救援活動……………16	5. 耕地復旧……………40
1. ヘリコプター空輸……………16	6. 治山・林道の復旧……………42
2. 自衛隊の活動……………17	第6編 手記編(雨襲う——齊藤史)……………44
3. 応急住宅対策……………17	伊那谷の災害に寄せて…仁科定吉 44
4. 生活援護と食糧配付……………17	すいがい……………小松あきえ 45
5. 機宜を得た衛生活動……………18	災害地四徳……………小松正実 46
6. 土木応急対策……………18	濁流をロップで……………洪沢かずゑ 47
7. 教育関係……………19	子どものくつをしっかりと ……………宮下かつゑ 48
8. 農業関係……………19	私の災害日記……………寺沢明子 48
9. 税の減免……………19	恐ろしかった集中豪雨…南田島主婦 50
10. 災害見舞金品……………19	災害をしのいで……………小松慶夫 51
11. 職業対策……………19	あとがき……………52
第4編 通信, 報道の再録……………22	

第1編 概

観

1. あれから3年半

あれからもう3年半の歳月が流れた。長いよう
で短く、短かいようで長かった年月だった。
復旧、復興へのあわただし明け暮れであっ
た。夜も昼もない汗まみれ血みどろの努力が続
けられた。国、県、村、各種機関の施策に呼応
して村民も協力一致、総けっ起、総親和をもっ
て村づくりに尽くした結果、今日見られるよう
な面目を一新した中川村の再建ができたのであ
る。

体験したもののみを知る、そう遇したものの
みを知る、失なったもののみを知る、ペシヤ
ンコに打ちのめされたもののみはその恐ろしさを
知る、あの昭和36年6月の集中豪雨による驚
天動地の大災害であり、史実と伝承をこえる未
曽有の災禍であった。

災害前の桃源郷を知らないものには災害直後
の姿を見てその変りようのひどさを感じとれな
いであろうし、それと同様に、災害直後の惨状
を目撃していないものには復興成った今日の平
和郷をあらためて見直し得ないであろう。

まるで砂漠のような、さいの河原のような、
冷え切った月の表面のような、全部落が一握の
土さえ残さずもぎ取られ、やがては全戸移住を
余儀なくされるような惨禍が3年半まえに突如
として伊那谷中川村に起こったのである。その
全ぼうはとうてい筆舌には現わし得ないが、そ
の一端をこの災害誌にとどめて永久に記念しよ
うとするものである。

2. 伊那谷災害の概要

(1) 気象と雨量

昭和36年(1961)6月初旬、中旬は晴天が
つづき梅雨模様が見られなかった。しかし高層
の高気圧が23日から急に弱り始め、本邦の南

岸沖に弱い梅雨前線が発生し、24日は九州南
方の弱い熱帯性低気圧の影響も加わって午後か
ら四国南部に強い雨が降りはじめた。25日に
は強い雨の区域が紀伊半島南部に移り、この地
方からは早くも水害のニュースが伝えられてき
た。

26日、梅雨前線は関東から東海、近畿、四
国を結ぶ線に延び、強雨域は西から東へ波及し
たところへ、26日夜半ごろから四国南方にあ
った台風6号の影響が大きく加わって梅雨前線
は著しく活発になり、強雨域は徐々に北上し
た。伊那地方は26日午前中は並雨、その後小
雨となったが、大雨必至と予想され17時45分
大雨注意報が発令された。



豪雨はいたるところ“なぎ”をつくった

27日は今回の豪雨期間中最も広い範囲に強
い雨の降った日で、台風6号の東側を北上した
南方の暖湿空気の影響で強雨域は伊那谷全域を
包み、正午頃から、が然猛威をふるい、集中豪
雨の様相は物すごいものとなってきた。

28日には気圧の谷は東に抜け、梅雨前線は
一時的に南にさがり、大雨になり易い気圧配置
はあまりかわらない所へ、夜になって新たな湿
舌がやや東によってはいつてきたため、県の南
東部に集中豪雨を降らせ、諏訪湖を氾濫させた。

29日以降、梅雨前線は次第に北上して天候
も徐々に回復に向った。

飯田測候所では26日0時から30日14時ま

雨量観測の記録 (単位 mm)

観測所	月日	6月24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	7月1日	計
飯田測候所		29	21	72	325	53	28	33	14	575.0
中川東中学		28.7	37	60.9	279.5	75.6	46.8	7.4	7.4	543.3
中川西中学		28.8	13.3	61.5	310.2	66.6	35.2	6.4	6.5	528.5

での連続降雨量は500ミリメートルとなり開設以来の最高を示し、被害に最も関係がある日雨量は27日9時～28日9時325ミリメートルの大記録となり、伊那地方でははじめてのことであった。



“なぎ”からでた土砂は山津波となって押し出し里を荒らした

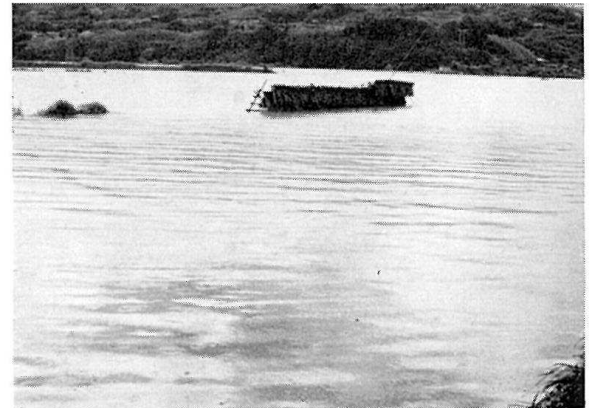
中央構造帯といわれる赤石裂線の地殻、花崗岩、片磨岩系の崩壊し易い地質、戦中戦後の林木濫伐、そこへこの連日の豪雨、せきを切ったように一度にドッと荒れ狂い、川という川、谷という谷、山の傾斜面ことごとくが土砂のなだれ、濁流の氾濫となって最大級の災害を本村に与えたのである。

(2) 豪雨の道すじ

この時は全県にわたり被害があり、わけても伊那谷はもっともひどく、どの市も町も村も手ひどく痛めつけられたが、まさかと思っていた溪谷の、ふだんは川とも思えない箇所や、水害には無縁と思われていた山中がこれほどひどい

惨禍をこうむるとは夢想もし得なかったことである。

恵那山を通過した梅雨前線集中豪雨は、まず飯田市伊賀良地区を荒らし、松川・野底川を奔流化し、上郷・座光寺をなめ、高森町の市田・山吹を奈落の底に突っ込み、このあたりから豪雨主脈は天竜川を東にこえ豊丘、松川町の生田地区をさんざんに傷つけ、伊那山脈を乗り越して大鹿村の北川北入をむざんに押しつぶし、ついに中川村に侵入して、陣馬形山の南麓・大嶺山の西麓・四徳川の峡谷を見る影もなく荒らしまわって、その余威をかって駒ヶ根市新宮川の本支流に牙を鳴らし、さらに戸倉山を突破して長谷村にとどめをさしたのである。



泥海の中の麦はざ

諏訪盆地と伊那谷が受けた豪雨の総量は、川床の高くなりつつある天竜川をもみにもんで巨石、流木、土砂を押し流す奔流となり、いたる所の護岸堤防を欠潰し、竜丘、川路を泥海と化してしまった。刈って干したばかりの麦はざがそのまま浮きつ沈みつ流れさった。

四徳の惨状



半分もぎとられた農協支所



四徳川がつき当り傾いた家



四徳川は兩岸の家と耕地をえぐりとり石川原にした



住居は山くずれで押しつぶされて後発火、土ぞうも屋根はもえおちた。この下敷きとなり小沢笹夫さんら6名圧死



山津波におし流されたバス乗務員は危うく脱出

こと
まず
川を奔
市田・
から豪
の生田
のこし
つ
大嶺
荒らし
宮川の
支して

は、川
で巨
いたる
と化
さが



山に逃げこみ恐怖の一夜をあかす



家を流された人は四徳神社に避難



僅か残った家財を流失をまぬがれた家に運びこむ



山くずれで半壊の四徳鉱泉



四徳分校に突き当る四徳川本流



福泉寺は土台をさらわれ四徳川にたおれ落ちた

桑原地区



←災害前

平和な里も一瞬さいの河原に（滝沢）

↓ 災害後



屋根まで土砂にうまる（洞）



泉



おしつぶされた中島兼雄さん住居，生きうめの圧死6人を掘し出している（西）

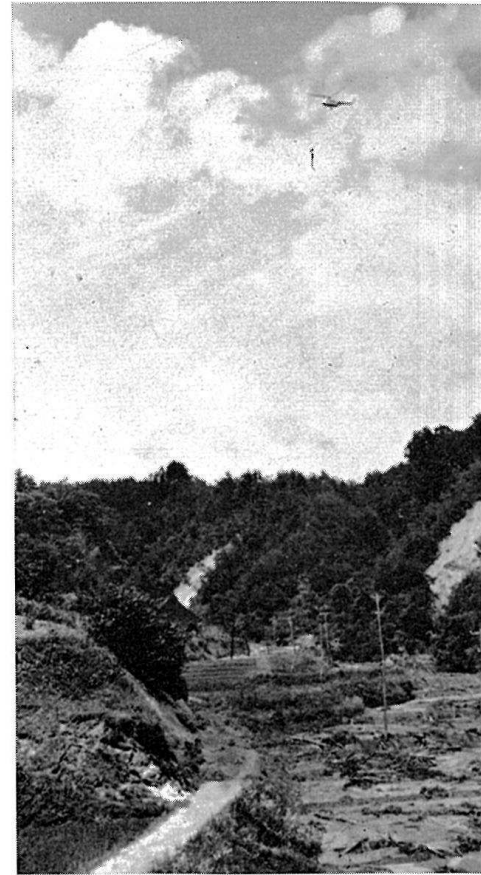


丸太橋はかつて自分の田のあったところにかけている（村）

 * 大 草 地 区 *



上 建物の土台を大谷沢に洗わる（北組）



右 土砂流入の井戸入沢上空を四徳に飛ぶヘリコプター

下 ドロに埋まった南山方



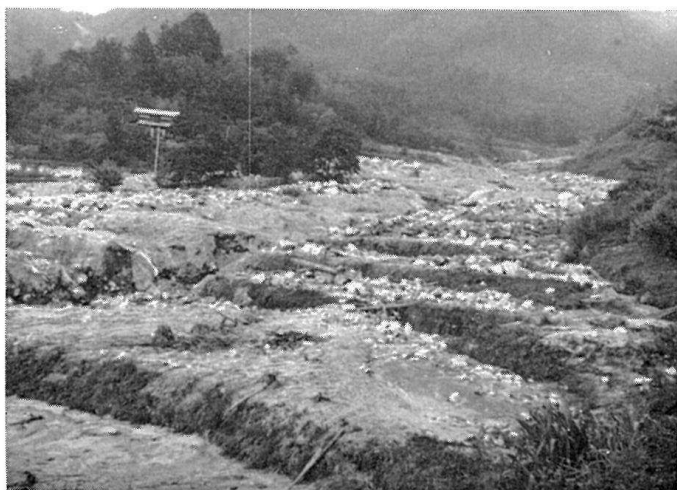
おし流された北山方線（西丸尾）



手取沢に荒らされた黒牛



柿の木だけが砂礫の中に残っている大谷洞



流木と石におおわれた大谷沢流域（北組）

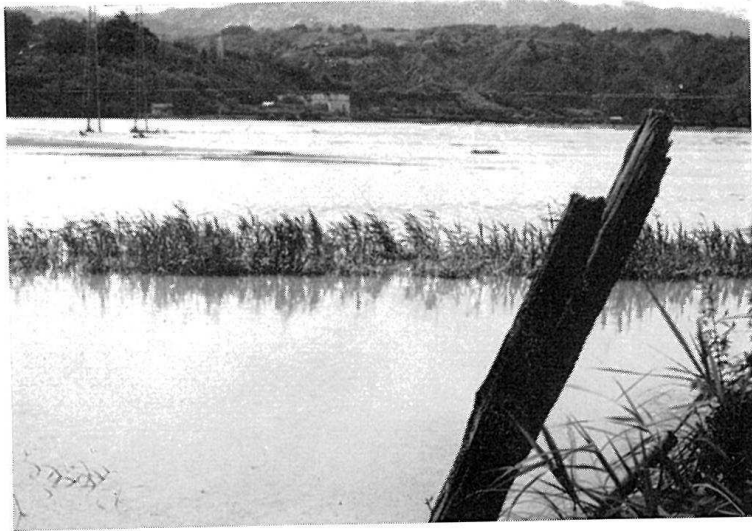


手取沢は土砂を押し出し、飯沼への交通をしや断した

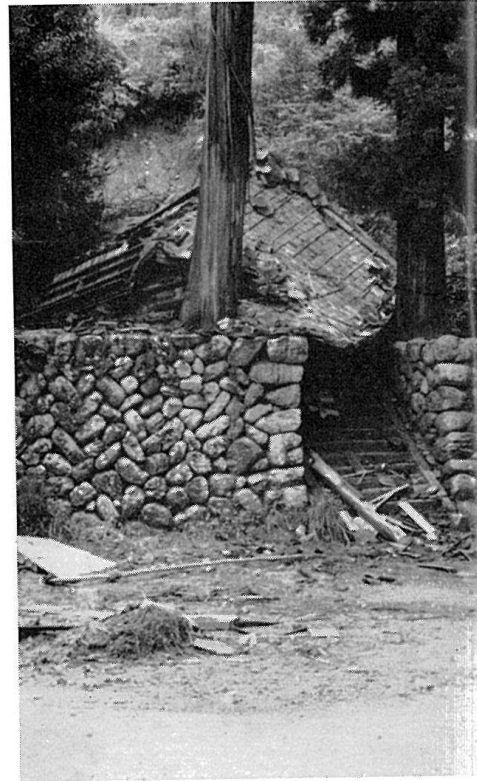


丈余の石が無数に庭先まで（大谷洞）

 * 天 竜 川 流 域 *



外記島から渡場にかけて一面の水は水郷を思わせる



土砂くずれて押しつぶされた南田島熊野社



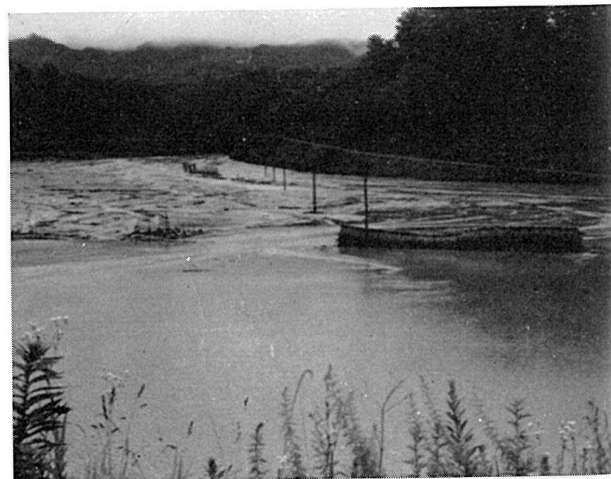
水中の麦はざ 現れているのは4段目



植えたばかりの稲も泥沼の中(保谷沢)



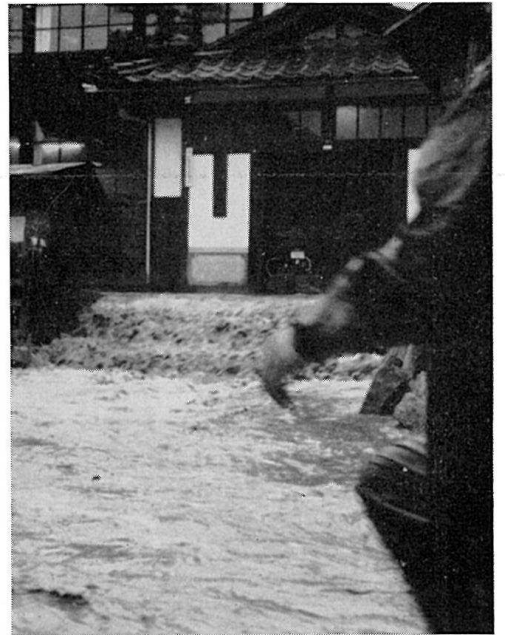
家をおしつぶしたなぎには無気味な亀裂(南田島)



ほうらい沢の土砂と水におおわれた北島



水びたしの役場片桐文所附近，玄関を濁流が淹になって流れおちる



島熊野社

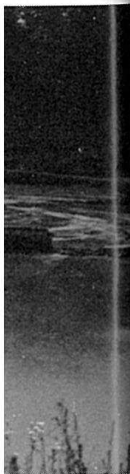


水のひいた後は一面の砂浜(小和田)

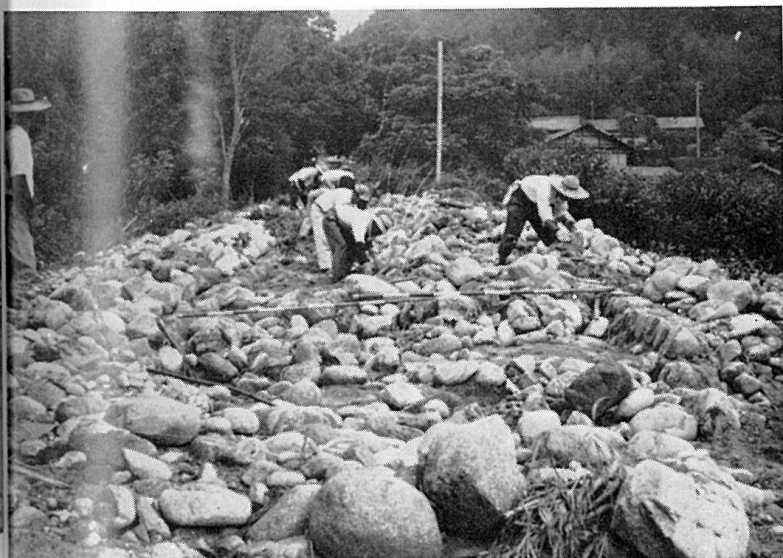
谷沢)



水に浮いた麦を寄せ集める(南田島)



島



堤防頭まで河床が上つた坊ヶ沢

第2編 中川村災禍の概要

天竜川・小渋川・四徳川・前沢川はもとより
 わみ沢・手取沢・大谷沢・深沢・ほうらい沢・
 長岩・黒牛沢・谷田沢・洞沢・坊ヶ沢・保谷沢・
 小河内沢・滝沢川・そのことごとくが濁流とな
 り、護岸を欠潰し、山くずれを伴い、住宅を流



村の玄関坂戸橋の橋台が洗われ自動車通行不能

し、人命をそこない、立木を根こそぎにし、耕地を流失・埋没し、ありとあらゆる甚大な災害をもたらした。低地はもとより、山の斜面に山くずれを起こし、あまつさえかなりな高地と思われた漆が久保・細久保・おの久保・峯や銭・大張・平鈴・くずが久保・保谷沢入りまで水魔のおそう所となり、戦慄すべき状態をひき起こした。いわゆる前門の虎を防いでいるうちに後門の狼に掻きまわされたわけである。

27日夜からは、橋梁や暗渠は押し流され、道路はズタズタに寸断され、部落はそれぞれ全く陸の孤島となり、電柱は倒れ、電線は切れ、暗黒の世界と化してしまった。

四徳・桑原・北山方・飯沼方面の有線もと絶えて、消息も連絡も通信も不可能になり、不安はつのるばかりであった。公社の電話も通じない部分が出てきた。局自体・放送室自体また災

害対策本部も、いつ山くずれ、鉄砲水にやられるかわからないと、刻々に危険を告げられた。



桑原線に土砂が押し出し通行不能

こうした不安と焦燥の中であって聞こえるものは烈しく降る雨の音、不気味な山くずれの音、流れゆく巨石のぶつかる音、いわゆる「あびきょうかん」のうなりであった。

1. 死者と重軽傷者

死傷者は 黒牛 男1名 女1名 四徳 男2名 女5名 桑原の西 男2名 女4名 桑原の村 男1名 女1名 柳沢 男1名 計18名(行方不明者を含む)で、このような大きな人的

36災害犠牲者

次の方々がこの災害の尊い犠牲者となりました。ここにつつしんで哀悼の誠を捧げると共に、復興成った災害の跡を天上よりみそなわし、その霊安からんことをお祈りいたします。

死亡日	氏名	部落	年齢
6月27日	奥谷三次郎	黒牛	55歳
"	木戸岡春子	"	35"
"	小沢 笹夫	四徳	50"
"	小沢志な江	"	48"
"	小沢 ふよ	"	76"
"	小松 幸子	"	51"
"	小松さよ子	"	39"
"	野呂つた江	"	44"

6月27日	平田 収蔵	桑 原	62 "
"	平田 清子	"	59 "
"	大倉 光子	"	27 "
"	大久保尋枝	"	36 "
"	中島 千文	"	12 "
"	初崎耕太郎	"	73 "
"	湯沢 宣一	四 徳	32 "
"	白川新次郎	桑 原	72 "
"	白川ふさゑ	"	50 "
7月2日	富永 豊美	柳 沢	52 "

被害をこうむったことは本村にとってはじめてのことである。

負傷者は重傷者男4名、女1名。軽傷者3名。負傷者の中にはヘリコプターによって病院に送られたもの、自衛隊に担送されたものもある。

2. 流失、全壊等の住家数

流失・全壊の住家は飯沼2戸、黒牛5戸、谷田1戸、北組8戸、中組1戸、北林1戸、南山方2戸、峯1戸、西4戸、滝沢3戸、洞6戸、村5戸、四徳52戸、中央1戸、南田島4戸、計97戸、98世帯、被災人員465人に及び、これらの中には母屋、土蔵、納屋、畜舎等あとかたもなく根こそぎ流失したもの、降雨中焼失し



半分はもぎとられ、一棟は土台をさらわれかたむいている(四徳)

たもの、僅かに残骸をさらしても全く用をなさぬもの、跡地に再建したくも宅地までさらわれたものなど二重苦、三重苦に悩まされたわけである。

半壊、浸水の住家は、半壊53戸56世帯、浸



床上まで流れこんだ土砂(中央)

水164戸に達し、非住家被害115戸を数え、建て具・家具・じう器・家財・家畜など流失・埋没・破壊、殆んど用をなさなくなり、その衝撃に氣力喪失、呆然たるありさまだった。「こんなことなら、みんな流されてしまった方がよかった。未練が残ってあきらめきれぬ」と嘆くものさえあった。



押し流された家尾の残がい(四徳)

3. 土木、耕地事業、農耕地、林野の被害

祖先伝来の美田、田植のすんだばかりの青い田、刈って干したばかりの麦はざ、それらは流され埋まり、かろうじて残った水田も、灌漑用

土木	農村	工工	事事	直轄河川工 事一部を含 む	915,194 590,938
耕地 事業	農 頭 水 農 橋 溜 揚	首	地 工 路 道 梁 池 機	104,0ha	157,856
				21 箇所	6,728
				44,343m	305,620
				3,022m	6,529
				13 箇所	1,132
				8 "	5,115
1 "	530				
合計				483,150	
農 耕 地	田	流 埋	失 没	129.6ha	60,648
				51.7 "	
	畑	冠 流	水 失	70.5ha	10,540
153.6 "				38,120	
合計				405.4 "	109,306
林 務	林道被害			13 路線	36,809
	林野治山被害			234 箇所	454,200
	林木・素材・製材被害			2,237m ³	6,445
	木炭流失			5,000 俵	2,000
	林産苗圃其他流失			63hr	9,328
合計				508,782	

(単位 千円)

水路を絶たれ、飲用水の水路・水脈も枯渇し、水のあとに水に窮する事態に陥った。

4. 教育・厚生・その他

四徳分校校舎は濁流による土砂と流木の中にその半ば 200 余坪を没し教員住宅は 35 坪、桑原分校住宅 15 坪、敷地崩落 15 坪、四徳診療所 22 坪半、校具・教具・医療具等の損失おびただしく 2,135 万円の被害となり、その他村全体の家屋家財の損失 9,600 万円を見つめられた



土砂の中から校具をほり出す子ども (四徳分校)

が、その他有形無形の損害は計り得ないほどの額にのぼることは想像にかたくない。

四徳分校は 7 月 6 日から小学部の授業を始めたが、その後全戸移住の運命を招来し、ついに昭和 38 年 8 月 31 日を以て廃校。明治 7 年、三楽学校として開校以来 90 年の歴史を持つ同校は、寛永 17 年以来 320 余年該地方教化の源泉であった曹洞宗福泉寺の廃寺とともにさびしくも終止符をうった。

名湯として知られて長く民営、後に村営保養所として委託経営中の四徳鉱泉も、昭和 24 年に開設された診療所もその機能を停止した。

5. 農産関係の被害

水稻・麦類・豆類・雑穀・甘藷・馬鈴薯・りんご・なし・もも・たばこ・こんにゃくなど被



階段状の水田も土砂と流木におおわれた (黒牛)



砂礫の中に頭をだしている桑畑 (大谷沢)

害総額 1 億 930 万円に達した。あと作として、大豆・とうもろこし・家畜用飼料などまきつけたが、耕土を奪われた砂地はやせ地化しており、その後の強い日照りで思うような収穫をみ

ることができなかった。

6. 公共団体等の被災

団体及びその他の災厄も甚だしかった。わけでも農協関係はひどい打撃を受けた。

◎南向農協関係

有線放送施設 流失 埋没 破損

木炭倉庫4カ所 流失 埋没

北山方出張所 移転

四徳加工利用部 流失

四徳稚蚕共同飼育所 流失

機械器具等 計 894 万円余。

◎片桐農協関係

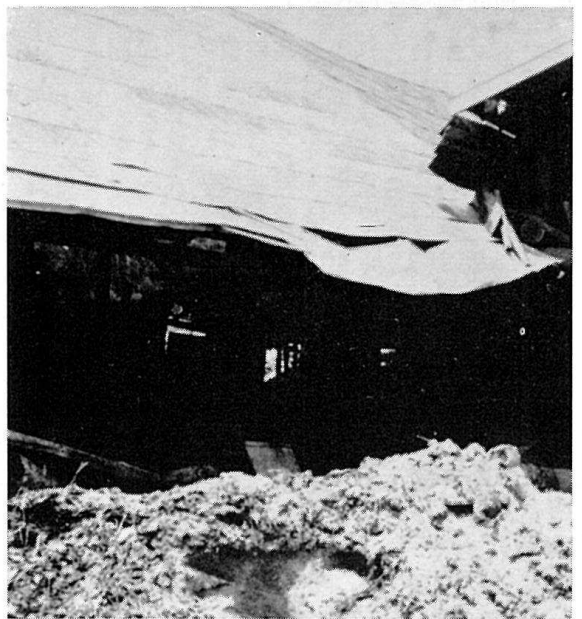
肥料 農薬 その他 計 162 万円余

商品流失, 冠水, 廃棄品, 計 1650 万円

工場関係では日の出社, 大成林業, 田島木材, 南向木材が機械流失破損, 素材製品等の流失およそ 1480 万円にのぼった。



水びたしになった片桐農協米穀倉庫前

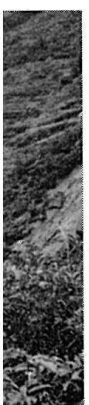


土砂に埋まった田島木材工場

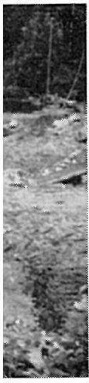
ほどの

を始め
ついに
年, 三
つ同校
り源泉
びしく
営保養
日24年
た。

薯・り
など被



牛)



して,
まきつ
としてお
護をみ

第3編 応急対策と救援活動

この驚くべき水害対策のため急きょ役場に対策本部をおき、村長助役陣頭指揮、その下に物資受入・主食住宅・物資配分・防疫衛生・連絡輸送・技術・災害事務通信・文書帳簿会計の八部を設け、迅速果敢、万般の処理に当たると共に、消防団等他の機関も直ちに活動を開始、村議会も、総務文教・農林経済・社会商工・土木耕地の四部が機宜の対策に乗り出し、いずれも自己自家の災害をかえりみるいとまもなく被害調査・情報しゅう集・慰問激励・応急対策にてい身した。いち早く要請しておいた「災害救助法」が28日12時40分発令された。

災害発生いらい、村民・団体・各種委員会・村・県・昭和病院・日赤医療団・伊那保健所・信大医学部・自衛隊・あらゆる機関の総力を結集し、罹災者の救済・水防作業・資材食糧の運輸・道路啓開・医療防疫等、緊急応急の各般措置に不眠不休の努力が注がれた。

1. ヘリコプター空輸

6月30日、県チャーター朝日ヘリコプター2機飛来、中川東中学校庭を基地として6月30日、7月1日の両日、まず偵察、つづいて救援物資の空輸を間断なく続行した。

道路の応急復旧が困難なため、四徳、桑原の食糧事情はひっ迫し、この輸送に自衛隊ヘリコプター出動を要請、7月5日より毎日3機による物資輸送が行なわれ、四徳農協付近、桑原運



ヘリコプターに緊急物資を積みこむ（東中校庭）



四徳川川原に降りたヘリコプター

	月 日	回 数	米	医 薬 品	援護物資	味噌醬油	野 菜	蕎 麦	計
民間機	6.30	9	304	10	766				1,080
	7.1	18	496	15	1,649				2,160
	小 計	27	800	25	2,415				3,240
自衛隊機	7.5	35	3,180	450	1,289			340	5,259
	6	35	2,551	202	993	259	450		4,455
	7	14	30	85	859	1,190		790	2,954
	8	13	1,092		150		709	892	2,843
	9	15	1,220		1,171				2,391
	10	10			1,529				1,529
小 計	122	8,073	737	5,991	1,449	1,159	2,022	19,431	
合 計		149	8,873	762	8,406	1,449	1,159	2,022	22,671

動場、滝沢川、小渋川、合流点の川原をヘリポートとして総計 22,671kg (約 1500 貫) の輸送に活躍した。陣馬形山、大嶺山を越える機体を送る人も、また現地で受ける人も心の底から感謝の気持ちでいっぱいであった。

2. 自衛隊の活動

松本部隊の一部が 28 日夕刻、松川町方面より 49 名葛島地区へ入り道路作業に当り、29 日には交替して桑原の西、おのくぼへ行き、山くずれのために、生き埋めとなった 6 人の救出作業に汗を流し、さらに交替してけん路、激流を冒して四徳へ救援物資を担送し生き埋めになった人の救出と、応急道路の開さくに従事した。困窮にあえぎ絶望に打ちひしがれていた人々に信頼と感謝をうけ、7 月 2 日の朝離村した。



半壊の四徳農協前に整列した自衛隊

一方高田部隊は駒ヶ根市中沢百々目木、桃ヶ平方面より折草峠を経て四徳に入り、7 月 2 日より 9 日まで 50 名が荒蕩化した溪谷に道路を築造し、仮橋をかけ応急的に駒ヶ根市方面より自動車を通じ得るまでにした。

3. 応急の住宅対策

応急仮設住宅 40 戸の認定を受け駒ヶ根市方面に 24 戸、(四徳罹災者) その他北組、南山方、柳沢山郷、南田島、西、洞方面に 16 戸建設し急場をしのいだ。

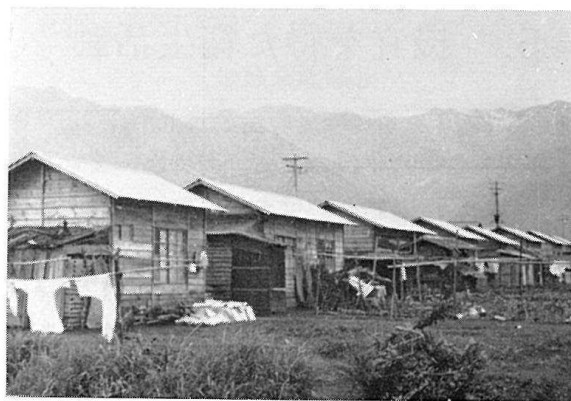
公営住宅 (30.24m²) (約 10 坪) 30 戸の認定を受け、当初は A 地区田島駅付近 8 戸、罹災現住位置 3 戸、B 地区は大草学校付近 4 戸、罹



公営住宅 (前沢川沿岸)

災現位置が 8 戸、C 地区桑原学校付近 1 戸、罹災現位置が 3 戸、D 地区が四徳学校付近が 1 戸、罹災現位置が 2 戸の計画であったが、全村にわたる災害のため敷地設定や資材運搬に非常な困難をしたが、各方面の協力と理解を得て多少位置に変動はあったがそれぞれ建設ができた被災者の受入れをすることができた。

またそれ以外に災害復興住宅 (住宅金融公庫ゆう資) 82 戸、一部応急修理住宅 68 戸もそれぞれ手配をして緊急住宅対策を行なった。しかし残っている家に居住と定めた人々も、それからは砂礫・土砂の掻き出しや、小破修繕などの労苦が続いた。村当局もまた公庫など各種資金のあっせんに極力尽力した。



駒ヶ根市原垣外に四徳移住者用に建てられた 24 戸の応急仮設住宅

4. 生活援護と食糧配付

かろうじて生き残ったが衣食住を流失し、今日を生きる生活に事欠く世帯が増加したので民

桑原の
ヘリコ
機によ
桑原運



庭)



計

1,080
2,160
3,240
5,259
4,455
2,954
2,843
2,391
1,529
19,431
22,671

生委員と上伊那福祉事務所が現地調査を行ない、早期生活保護法を60人に適用し保護を始めるとともに再起健闘するよう慰問激励をした。



ヘリコプターで運ばれる緊急食糧

また生活保護を含め、災害により食糧に困難する罹災者に当分の食生活維持のため米10,870,324kg(約181俵余)と、2食分詰め乾パン2,209袋とを配布した。このたびの災害で、消防団員の活躍は目覚ましいものがあり、特に、6月28日被害軽微地域の団員60余名が米1斗ずつ背負い、大嶺山から陣馬形の尾根伝いに5時間を要して四徳へわけいった。きょうの食事の目安すらない四徳の人たちにとって、この米が大きな力づけになった。

5. 機宜を得た衛生活動

6月28日から防疫班の活動が開始され、まず飲料水の供給確保のため、汚染水・天水の消毒を行ない、あわせて生水の飲用禁止、手洗いの励行、伊那保健所職員とともに2回にわたる現地指導、手動ろ水機四徳空輸利用、井戸水の水質検査(217件)同じく水道の検査、床下浸水以上の家屋の消毒等を実施した。

昭和病院の富安医師は、6月28日他にさきにかけていち早く看護婦1名をとめない、駒ヶ根市中沢を経て、数時間泥ねいと悪戦苦闘の末、四徳部落に入り、負傷者の治療、病人の医療にあたり、外界と絶された地域で絶望感におおわれた人々に対するこの初期救護は、大きな力づけになった。

諏訪日赤奉仕班は医師2名、看護婦3名によ

り、桑原四徳方面に来援し、応急治療、死体検査等にあたった。

また信大医学部、公衆衛生学教室、釘本完教授一行9名は7月4日～7日まで四徳の大張集会場を本拠として医療と防疫に当り、伊那保健所保健婦2名を加えて今度は8月6日から再び同教授ら一行10名が四徳に入り、8月12日までの1週間、四徳全区民を対象に、健康診断、投薬、健康管理などに献身的な奉仕を続けられた。当時まだ同地区は、諸条件が悪く、困難な事情のもとにあったが労苦をいとわないその努力のため、悪疫の発生がなかったばかりではなく容態悪化等一件もなかったことは、今なお感謝されている。

さきにも、のべたが四徳の重傷者2名はヘリコプターにより、桑原の2名は自衛隊の担架及びヘリコプターにより、他の1名は別に病院に送られ加療後全快している。ヘリコプターによる投下等により医薬品が届けられたこと、救世軍本部や日本キリスト教本部から総合ビタミン剤を贈られたこと、特志者によってヨーチンを寄せられたことなど、各方面からの救援のありがたさは忘れ得ないところである。

防疫上、鼠族退治、有害昆虫防除の薬品を7月中旬までに全部落にゆきわたらせ環境衛生の万全を期した。

6. 土木応急対策

県道関係

1800万円を投じて橋梁5、栈土31、崩落48、坂道3の応急臨時修復をして、通行、資材運搬等に支障のないようにした。大島飯島間のバス運行はこれにより折り返し運転等の不便をなくしたが、桑原線、北山方線のバスは昭和39年まで運行を中止した。

村道関係

応急工事費300万円で橋梁5、栈土1、崩落8、仮道2を架設築造した。

河川関係

県工事は1200万円をもって前沢川、四徳川

のしゅんせつ護岸工事等を施行し、村工事として洞沢、保谷沢に65万円の工事を施行した。

水防について

天竜川，前沢川，洞沢，大谷沢，手取沢に水防資材費52万円をもって木流15，積土俵6，牛柵11，蛇籠14箇所を築いた。

7. 教育関係

四徳分校は小学部は土砂掻き出し，応急修理を加えて，授業を開始したが，中学部は臨時宿舎に收容して本校に通った。その後四徳83戸全部移住のため学校は廃校となり，その校舎を37年は養蚕に利用したが，残存校舎はこれから転用について研究することになっている。

8. 農業関係

農業災害総合対策として 1. 被災者の転住対策，2. 災害地の復旧対策，3. 資金対策の3項9目について，各機関に対する要請・陳情・交渉等をはじめ，災害地視察に来伊，来村した要路者への具申，出県運動，他郡市町村との連繋等，村当局と提携してあらゆる手を打った。

また，当面の対策としては代替作物のまきつけや，病虫害防除，種子配付など農協とも連絡をして応急施策を行なった。

9. 税の減免

被害者に対する税の減免については，「村税減免条令」を制定し，死亡・負傷者・生活扶助・財物被害・土地の流失・埋没・土砂流入・家屋被災・などその程度に応じて10割から2割までの9階程の減免措置をした。

10. 災害見舞金品

本村の災害が新聞・ラジオ・テレビ等に報道され，それがまた日，一日と惨害が予想以上に深刻なものと伝えられるに従がい実に多方面の

団体，個人，そして有縁無縁の各方面から続々と見舞の金品が贈られた。

かつて地震・台風・火災・水害等の経験があり，泣く思いをして切り抜けられた婦人から切切たる同情溢るる慰問文を添えて特に「あわれな母親へ」と指定されたものもあり，実社会へ就職して日も浅く，少ないサラリーを割いて贈られたむきもあるなど，いずれも涙の出るような有難さであった。

11. 職業対策

転職のあっせん

農耕地の，災害の状態は予想外に大きく，また家屋家財を流失したものが多く，あすからの生業の目安もたたず，したがって生計に事欠くものが数多くでた。このため，農業から他職業への転換，これからの生業指導について，行政的な配慮が強く望まれ，これに呼応して伊那公共職業安定所の係官は，災害直後の7月から数次にわたり四徳，桑原地区に出張して職業相談を受けつけた。ことに道路の跡形さえわからない中を，けいたい食糧を持ち，寝袋を背負って，泥まみれになって災害激甚地を歩き，職能をこえた親身になっての職業相談は，被災者に大きな感銘を与えた。この結果次のような転職（就職）者がでた。

地域別就職状況

地 域 別	男	女	計
駒ヶ根市	38	42	80
宮田村	18	14	32
伊那市	7	8	15
飯島町	9	3	12
辰野町	4	—	4
中川村	17	6	23
西春近村	10	—	10
県内	5	3	8
県外	4	—	4
計	112	27	188

なおこれは，昭和37年度末までに伊那職安扱いのものでその後集団移住等で大部分が転職した。

就職したく金の交付

また、この梅雨前線豪雨被災転職者には、長野県が被災者就職促進補助金交付要綱を定めて、就職したく金5,000円、就職手当を同一事業主に引き続き雇用される期間のうち、はじめ6カ月間について18歳以上月3,000円、18歳未満1,500円が交付されることになり、いっぽう、被災者を雇い入れた事業主に対しても、はじめ6カ月について18歳以上2,000円、18歳未満1,000円の雇用奨励金として補助されることになり、次表のとおり受給した。

就職補助金等交付状況

種別	件数	金額
就職したく金	188	940,000
就職手当金	18歳以上	180
	18歳以下	6
小計	188	4,234,000
雇よう奨励金	18歳以上	165
	18歳以下	6
小計	171	2,016,000
合計		6,250,000

就職したく金と、手当金の件数の差異は6カ月以内に退職して支給されなかったため。

雇よう奨励金と就職したく金の件数の差異は、官公署には雇よう奨励金が交付されないため。

職業訓練の実施

積極的に、転職あっせんをおし進めるとともに、いっぽうでは技能を身につけて、有利な就職ができるようにするため、県では、駒ケ根市に、被災者のための、臨時職業訓練所を開設し、ブロック建築科20名、板金プレス科20名の技能訓練を、36年10月1日から、翌年3月31日までの6カ月間実施した。また、伊那職業訓練所に36年10月から増設された電子科にも被災者を入所させ6カ月間技能修得をさせた。

この訓練生に対して、県は、被災者転職職業訓練習得手当交付要綱を定め、訓練期間中日額300円と訓練を修了して就職するときに、した

く金として5,000円を交付した。また、被災市町村で、伊那谷災害転職訓練者援護会を組織して、訓練生の宿舍、給食、実習器具などの補助をした。

本村からは、次表のとおり入所し、それぞれ訓練を修了した。なを、この他に、飯田職業訓練所に2名入所した。

訓練所修了生就職したく金

科目別	人員	金額
駒ケ根 板金科	7	35,000
	11	55,000
伊那電子科	7	35,000
合計	25	125,000
訓練手当	25	1,125,000
合計	25	1,250,000

訓練生就職状況

地域別	駒ケ根		伊那電子科	合計
	板金科	ブロック科		
駒ケ根市	1	8	1	10
伊那市		1	2	3
飯島町			2	2
箕輪町	1			1
宮田村	3		1	4
中川村		1		1
県内	2	1	1	4
計	7	11	7	25

村内職あっせん所開設

就職、転職のあっせんを、伊那公共職業安定



内職（果樹袋ぬい）講習の婦人たち

災市
織し
補助

それ
業訓

所と協力して推進するとともに、村では、婦人が屋内作業により収入の道をみいだすために、36年10月内職希望者を調べ、これに対して、12月11日、12日の両日、果樹袋ぬい、時計バンド製作の講習会を開いたところ、約200名の婦人が参集受講した。

その後この両業種について、村であっせんを行ない、約80名がこれに従事し、月額4万円程度の収入をあげた。それが今日まで継続しており、人員は30名に減少したが、技能も熟練して、1人当月額6~7千円の収入をあげているものもある。

頁
10
10
10
10
10
10
10

計
0
3
2
1
4
1
4
5

安定



第4編 通信報道の集録



1. 有線放送 MHK

有線放送は、村内の状況を刻々とキャッチし適切な報道により大活躍した。開局してからちょうど1周年になるといって、その記念放送番組を企画していた矢先きだったが、それを待たずに、村人は有線の重要性を最高度に認識した。今度の水害で有線が「いの一番」に賞讃されてよいということに異論はないと思う。当日の有線放送原稿を災害を想起する資料として次に掲げるがすべてが鉛筆による走り書きである。

○中林・北林・間柱

石神の住宅が危険、大至急直行。

中組消防団は谷田の白沢馨氏宅へ直行せよ
黒牛の皆さん。大トビを持って下村宅へ集合（午後3時30分）

○谷田、橋沢春雄氏宅危険、すぐ直行せよ。

全村一般の皆さんは各分団の指示に従って行動を取れ。

桑原・四徳・県道・石神坂は通行不能。北山方一部不能。生徒は対策本部と連絡して下校させる（午後3時40分）

○中村（四徳）の炭小屋が流失寸前、すぐ集まれ。

スクールバス、2時半に出た。（桑原行き）
北井の所から歩いて行くから迎えに出よ
四徳、大張の皆さん、仁科定吉さん宅流失

寸前、すぐ頼む。

○放送室から。緊急放送のためボリュームをいっぱいにしておいてください。

（午後3時55分）

○対策本部から。全村的に水害が大きくなり応援はできかねるので、各部落で、総代を中心に水防につとめよ。

○水害報告。埋没戸数・流失家屋・人畜の被害・田畑被害の報告を水害対策本部へ報告せよ。（以下、時刻記載なし）

○西（桑原）の中島兼雄さん宅へ応援に行った方がたが5~6名下敷になってしまいました。桑原区民は現場へ直行せよ。

○沖田の役員、伍長は大至急集会所へ集まれ洞（桑原）の今井兼正さん宅へ大きい土砂くずれあり。救援すぐ頼む。

大谷洞がくずれ、宮下宅まで来ている。中組はすぐ行け。

下平の森下さん宅へ予備消防団は全員集合
西の消防団員は中島兼雄さん宅へ。家の下敷になりましたので救援に出動せよ。

○三共、北林の消防団全員、各戸一人ずつ養魚場へ出動せよ。

沢が荒れ、鉄砲水の出る恐れがありますから坂戸付近の方は避難の用意をしてください。

社宅裏辺からの堤防の欠壊のおそれあり。
下島、外河原の関係者はすぐ現場に出るように。

○飯田風越高校へ通学している生徒さんをお持ちの皆さんへお知らせします。きょうはバス・電車ともに不通のため、生徒さんは学校の指示により、親戚・友人の所に宿泊いたしますから心配なさらないようおしらせいたします。

○大谷の宮下さん前から松島さんの裏へ出る川が氾濫している。中組・北組は注意せよ。下流にあたる北組は厳重に警戒せよ。

○水害対策本部からの水害途中経過を申し上げます。

四徳・桑原は電話不通のため、その後の詳しい状況はわかりません。

県道・国道、これは竜東、竜西とも全線不通。また下伊那方面との電話連絡もできず、本村は孤立状態におかれています。

○鹿養から柳沢へのぼる途中、土砂くずれで堤になっておるところが、もうしばらくで欠潰します。下流の北林、間柱の皆さんは鉄砲水に充分注意してください。

○中組の皆さん。山口の堤がだいぶ増水して、いよいよ危険の状態になりましたから、下流に当る皆さんは充分注意してください。

○北組の皆さん。松島正男さん宅付近の暗渠が欠壊いたしましたから、その河川筋の皆さんは避難してください。

○中組の消防団と、予備消防団の家庭の皆さんへお知らせいたします。団員の皆さんは全身ズブぬれでありますから、それぞれ着替えを持って中組集会所へお出かけください。

○山ぬけがあり、寄宿の生徒、辰巳屋から南の方は避難せよ。

○水防本部からの連絡を申し上げます。葛北、北林間の道路、日の出社の南が欠潰しており、通行できませんからお知らせいたします。また北林、田島間の暗渠、谷川政人さん宅付近の暗渠も決潰しておりますから、この方面の通行もできません。

○長野県の水防本部からの水防情報をお知らせいたします。今晚から明朝にかけて南信方面は150ミリの降雨が予想され、特に伊那谷は嚴重な警戒を要するとの連絡がありましたから、各水防班および各家庭とも充分注意してください。なお去る24日から降り続いた雨は、中川東中学校の観測によると286ミリに達しています。

○北組の米山秀雄さん宅の暗渠が危険。消防は集合。

近所の民家は十分警戒を要す。(午後11時30分)

○鹿養の土砂くずれで堤になっているところがくずれ、町方面へ流れ出た。注意せよ。

(午後11時40分)

以上が、27日当夜の有線放送概要である。四徳、桑原方面、北山方、飯沼方面ともに早くから有線がと絶して被害の状況も入らなかったようであるが、そのころすでに該部落は悲惨な状況におかれていたわけであった。

[伊那路 昭和36年10月、梅雨前線特集号、続松村義也稿]

2. 濁流の中の片桐有線

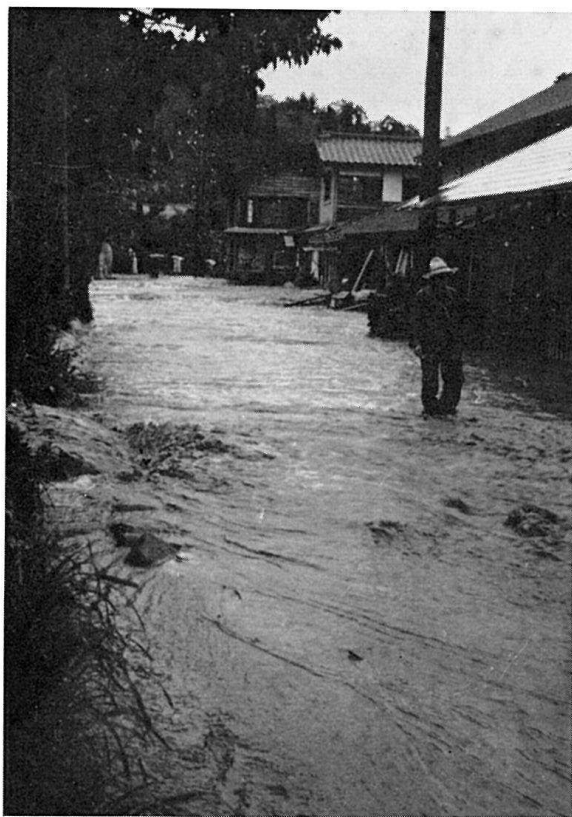
片桐有線放送も、災害発生以来、瞬時の休みもなく、電話交換と、情報放送を続けた。

当時の業務日誌をみると

6.26 天竜川、前沢川刻々増水、非常準備態勢に入る。

6.27 ラジオ中継、自主番組を中止して非常態勢にて交換放送を行なう。徹夜で対処午後から無料で通話。

6.28 ラジオ中継、自主番組中止。午後7時



水びたしの片桐農協この二階で有線は最後までがんばった

30分再び豪雨で被害続出、暁方1時間
全員退避する。

6.29 ラジオ放送はニュースのみとする。交
換放送は徹夜。

と記されている。特に、27日夜半から再び降
り出した雨のためついに、大黒沢との合流点付
近で28日午前2時頃前沢川の堤防欠潰、勢に
乗った濁流は中央部落の水田を押し流し、役場
片桐支所、片桐農協はほん流に洗われ、危険な
状態になった。農協の二階にある放送センター
は、流れの中の孤島の感があったが、正確な情
報を流すことと、緊急連絡の重要性から、幾た
びか災害対策本部から出された退避勧告にもか
かわらず、交換台を守ったが、28日明け方
になり、水量はいよいよ増して、二階の交換台に
不気味な音がひびくようになった。「交換台も
遂に危険な状態になりましたから、一時交換を
打ち切り全員退避します」と告げて避難した。
しかし有線放送の重要性を認識した職員は、1
時間程で腰まで水につかり交換台にかえり再び
放送を続けた。

当時の放送原稿の特徴のあるものを摘記して
みる。

○前沢川と大黒沢の合流点付近で、欠潰がは
なはだしくなっていますから、中央部落の
人は学校の方へ避難してください。桑原方
面では5~6名の行方不明者がでています
からこのようなことのないよう注意してく
ださい。——6.27夜——

○中央の皆さんへ。たくさん、たき出しをし
て松下正直さん宅にありますから、被災者
は、自分のうちでたかずに、食べに行っ
てください。——6.28朝——

○小和田婦人会支部長から会員へお知らせ。
この際婦人は、対策本部の指令に従って家
庭の動き方をあやまらない様落ちついた行
動をとるようお願いいたします。退避の指令が
ありましたら坊ガ沢から南は学校へ、北部
の方は、お宮から竹ノ上の方へ避難して
ください。——6.27——

○みなさんおはようございます。水害恐怖の
一夜があけましたが、各部落に大きな被害
を生じ痛ましい限りです。心からお見舞を

申し上げます。これに屈せず一致協力し
て水害防止と、復旧に努めましょう。今日
から当分の間、無料で電話のお取り次ぎを
することにします。——6.27——

このように、非常事態の発生時における、両
有線放送の的確な処置は、人心安定の上に大き
な役割を果たした。

3. 中川・田島局の活躍

村内における有線放送の活躍とともに、外部
との交通がと絶した中川村にとって、唯一の連
絡方法は、郵便、電話に頼る以外に手段がなか
った。

中川、田島両郵便局は、それぞれ非常態勢を
とり、通信の確保に努力した。中川郵便局は、
局舎に床下侵水をはじめた中で、しかも、局員
10名が自宅の被災にもかかわらず、懸命に業務
を続けた。郵袋は、道路が寸断されバスが運行
しないため、昔のように人間が背負う人夫送が
続けられ、四徳への郵便はへりで空輸した。6
月27日午後7時退避命令が出たため、市外電
話交換業務を田島局に委せて、重要書類ととも
に東中に避難した。

いっぽう田島郵便局は、27日から非常態勢
にはいり、全局員が宿直して緊急業務にたずさ
わった。特に、27、8日は中川局が退避したの
で、市外電話線を確保するため前沢川の激流
が、直接局舎の壁にぶつかる中で、災害対策
本部の再三にわたる退避勧告にもかかわらず、
交換手の腰になわをかけ、他の局員がそれを支
えて、最後まで市外線を守りとおした。このた
め災害時で、郡・県との公用電話また、報道機関
などとの連絡も断絶することなく続けられた。

災害により両局の扱った電報は、中川局が6
月27日から7月10日までの発着信が1516通、
平常は1日20通。田島局は、27日から30日ま
で807通、平常月200通とくらべて、いかに、
災害時の通信が大切であるかがうかがえる。

4. 役場水害日誌抄録

○6.27日。国・県各官庁への報告と、NHK、

SBC への報道救援の要請等で徹夜。

○6.28日。調査班を編成。雨を衝いて出発。四徳方面を残し帰庁報告。災害救助法適用の旨正午すぎ通知あり。

自衛隊到着。道路啓開。

日本赤十字社諏訪支部医療班。伊那保健所防疫班来村。

○6.29日。四徳方面調査班帰庁報告。役場職員及び消防団等、連絡並びに救援活動開始。

○6.30日。朝日ヘリコプター活動開始。

滝沢部落状況判明。

緊急援護物資、午後中川橋対岸着、中継して中川東中学校庭へ。

県議数名来村。

村議被害地状況視察。

○7.1日。郵便局簡易保険無料診療班来村。

戸枝村長ヘリコプターで四徳部落へ。慰問激励。

○7.2日。陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯部隊のヘリコプター、午前9時着。大型機、小型機四徳方面を主として救援物資運搬。

地方事務所厚生課職員、昨夜来救援物資の配分と荷造りに徹宵作業。

○7.3日。自衛隊大型機活躍。

防疫班消毒出動。

○7.4日。信大医学部一行四徳へ。

中村建設大臣来伊。戸枝村長陳情のため飯島町へ。

○7.10日。今日まで6日間連日物資運輸。罹災地住民に大きな安心感と、疲労困ぱいの中からたち上がらんとする勇気を与え、村民一同感謝の念で一ぱいであった。自衛隊ヘリコプター離別。

5. 東中災害日誌抄録

その間の模様を災害日誌によって回顧すると(項目のみ)、○27日△第5時現在降雨量246.4mm 2時10分集団下校と決定 △黒牛・谷田生15名作法室合宿と決定。

○28日、△臨時休校、△被害意外に大、道路寸断、通信全村まひ状態となる。△全職員学校に

待機。部落別派遣を決定。△桑原で生き埋め7名とのこと。△被害者続々体育館と理科室に避難。

○29日、△臨時休校職員会。△まだ危険残るため水害調査延期。△生徒の激励・注意のため放送可能区域に校長が放送。△黒牛・谷田生徒消防団員、職員と共に午前11時半帰宅。四徳大半流失、死者7の報はいる(午後2時)。△消息不明の生徒4名出る(後に無事とわかる)。

○30日、△天気は小康をとり戻した。そして最大の悲しみは小学校桑原分校に1名の犠牲者を出したことである。Tさんが教科書を取りに家に戻って遭難したことはほんとうにくやしい。

(略)△アサヒ航空の空輸基地となり山のような救護物資が被災地に動く。

○7月5日、自衛隊の空輸基地として内外一層騒然。

○7月9日、四徳分校生徒受け入れのため、旧伊南社の清掃、寝具・炊事の準備等々。

[伊那路、昭和36年10月、梅雨前線特集号、続、矢崎明稿]

6. 日刊新聞から転載

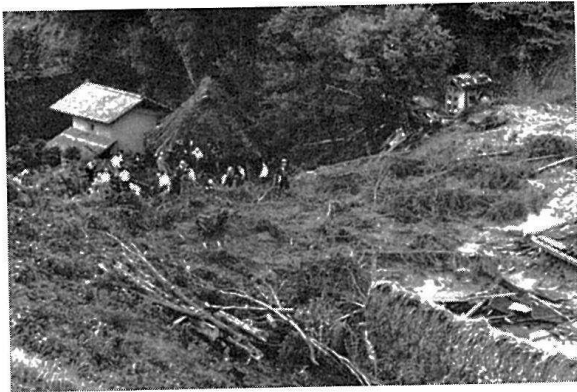
救助員6人絶望

中川村再度のガケくずれ

27日夜4時半頃、中川村大草桑原、農業中島兼雄さん(48)方の裏山のガケがくずれ、中島さんの住家は半壊し、兼雄さんは生き埋めとなり、救出されたが重傷の兼雄さんを救助するため付近の人が半壊した家屋にはいったところ、さらにガケくずれが起こり、6人は生き埋めになって死亡。中島さんの家族ら5人は、けがをした。(朝日新聞6月29日6面)

生き埋め続く

上伊、中川村桑原農、中島兼雄さん方が27日夕、土砂くずれで崩壊し、逃げおくれた次女千文さん(12)が生き埋めになったが、助けに行った近所の男2人、女3人が2度めの土砂くずれで生きうめになった。奥地のため救出も全然できず、駒ヶ根署などの救援隊も28日、明け方ようやく出発する有様だった。(同12面長野版)



桑原の生き埋め現場

空から食糧など救援

孤立した中川村の被災地

上伊那地方事務所に設けられた「上伊那地方災害対策本部」は中川村四徳、桑原や長谷村方面など奥地の被害地に食糧など救援物資を送り込むため、ヘリコプター2機をチャーターしたほか、自衛隊にも出動を頼んだが、30日待望のヘリコプターが伊那市に飛んで来て、同市中学校に待機したが、午前中はなかなか晴れ間が見えないので飛び立てず、本部員をイライラさせた。

午前11時ごろ、ようやく晴れ間が多くなり、第1機が中川村大草地区へ向かった。本部員はみんな祈るような気持ちでヘリコプターを見送った。このヘリコプターは2機で、伊那中川村間を往復、同日午後までに1200食分のカンパンなどを送り、大草からさらに奥地の被害現場には同村消防団員や自衛隊員が運びあげた。

(同7月1日12面)

水禍の伊那谷をゆく

豪雨で孤立状態となった上伊那中川村四徳・桑原地区の被災者を救うため30日ヘリコプター2機が出動、大がかりの救援物資の空輸作業をしたが、空から見るこの地区の災害状況は予想外に大きく、3日間災害地に閉じ込められた被災者たちは、空からの救援物資に群がるように飛びついた。県が農薬散布用にチャーターしたが、応急措置として救援物資空輸に上田市か

らまわしたベル47G2型のヘリコプター2機は30日昼すぎ前後して基地の中川村東中のグラウンドに着いた。地上で待ちかねていた中川村消防団員ら地もと救助隊の間から「ワッ」と歓声があがる。ヘリコプターは両脚に取りつけた網の上に中川村災害対策本部が用意した乾パン・米・救急医療品などの救援物資をくくりつけ、30分—1時間おきに飛び立つ。基地の救援物資の山はたちまち小さくなっていく。

救助物資を積んだヘリコプターは山間の部落に爆音をとどろかせながら、山の尾根をほうよりに舞い上がる。



急救物資を積んで四徳に飛来したヘリコプター

四徳川は激流でフチを削り取られ、川幅は平常時の3~4倍にひろがり100メートル余、四徳桑原あたりの水量はさすがに減ったものの、ながながとつづく川の両がわには無残に押しつぶされた民家が各所に点在、被災者が手や衣類を振っている。この衣類は水魔とたたかったあとをうかがわせるようにドロまみれ、助けを求め必死の表情が見うけられた。滝沢部落では8戸の民家のうち4戸が流れる土砂に土台をすくわれ、つぶれているのがはっきりわかる。四

徳の民家密集地にはコイノボリを吹き流しかわ
りに立て、被災者のほか自衛隊員、消防団員が
待ちかまえていた。ここでヘリコプターは材木
を並べた急造の発着点におり、救援物資と慰問
の手紙を手渡した。また着陸できない場所
では、地上すれすれまで降下、物資を落とした
が、そのつど被災者は疲れはてた顔にホッとし
た表情を浮かべていた。(信濃毎日新聞、7月
1日、中川村にて高雄記者)

不明の16人無事

29日夕、自衛隊救助隊から行くえ不明を伝
えてきた上伊那郡中川村桑原、農業細川一男さ
んら4世帯16人は健在であることが30日午前
3時ごろ駒ヶ根署員らによって確認された。

(6月30日、信濃毎日新聞)

全地区民無事とわかる

一時、部落全戸流失、区民全滅を伝えられた
上伊中川村滝沢地区は30日夕方になって全地
区民が無事であることがわかって駒ヶ根署、県
対策本部もどっと喜びの声をあげた。同地区の
流失家屋は滝沢集会所、下沢忠雄さん、小沢徳
定さん、宮下正利さん方で、沢渡正人さん方な
ど5戸は流失を免れた。(朝日新聞7月1日長
野版)

水禍の中心地を飛ぶ

諏訪・伊那の水害地を空から見るため、30日
昼すぎ、晴れ間を見て、長野飛行場から一路南
に向けて飛びたった。(中略)機は方向をかえ
て、上伊那の南端、中川村の上空を旋回する。
ここもすごい。天竜川に面した大草部落あたり
であろう。泥水をかぶって押しつぶされたよう
な家のあとがいくつかとびこんでくる。1戸や
2戸ではなさそうだ。人影も見あたらない。中
川村の被害は1部落が全滅したというより、と
きがたつにつれてあちらの部落で1戸、こちら
の部落でまた1戸やられているといったぐあい
で、散らばっているのが特徴——。天竜川の

ぞいては、どこにそんな犠牲を出した川がある
のかと思わせるくらい。大草部落あたりには目
につくほどの支流はない。ところがさして高く
もない裏山は、カミソリの刃でそぎとったよう
にえぐられ、そんな山の中腹に1軒、また2軒
と家がある。裏山から山みずがどっと出れば、
ひとたまりもなく押し流されるわけだ。おそら
くアッという一瞬のできごとであったろう。

それは鉄砲水によってだ。そうとしか考えら
れないほどの惨事に見える。村の道路にはあち
らにひとかたまり、こちらにひとかたまりと立
ち話ししている村人たちの姿が見られるが、ま
だあとかたづけも手につかないありさまだ。

(7月1日、信濃毎日新聞)

一夜明ければ河原 変りはてた部落にボウ然

うえと恐怖に戦く、声もなくボンヤリす
る予ら、三日間とだえていた四徳の表情

駒ヶ根署の根橋署長は、きのう29日、管内
で消息を絶っていた地区の中川村四徳、駒ヶ根
市中沢の災害地に2人の署員を同行して乗り出
し、夕方帰ってから現地の状況を次のとおり語
った。

一行は駒ヶ根市東伊那から同市中沢区中割で
車を降りて永見山～早草(サソウ)地籍までは
道路をころうじて歩いていったが、折草峠まで
は道路はズタズタ——山林の中をかきわけて峠
についた。折草峠に登って中川村四徳部落を見
わたすと部落のあったところは一面の荒河原
——青いものが少しも見あたらず、近づくとつ
れ、家の倒壊や、土砂と家の柱にはさまれて死
んでいる婦人の姿が見られるあたりは目を覆う
ばかりの惨状だった。そして付近の山林に退避
している部落民をようやく発見した。約250人
の住民は、炭焼小屋や木の下などに青ざめた顔
をしているが、お互いに生き抜こうと励まし合
っている。——子供たちは空腹で泣き声も出な
いのかボウ然としているのみ——災害時の状況
を聞いてみたところ、27日夜10時ころから東
西の山が無気味なうなりをたてる。ゴーゴーと
いうような音だったという。約1時間もたった

ころズズー、ズズーと鳴りながら突然地震のように家がくずれだした。各家とも外に飛び出した。豪雨のため付近一帯は真暗で、お互に呼び合いながら着のみ着のまま付近の山林の中に逃げ込んだ。

恐怖の一夜は明け28日になったが家は流され、部落は、あとかたもないように一面の河原と化した。流れ出して来た大きな石が至るところに転がり、残った家も危険に瀕している。家には帰ることもできないまま、炭小屋、高台の家に入って雨をしのぐ。雨間に食糧はこびにかかろうとしたが、かんじんの農協の食糧倉庫も流されているので、住民は不安におののき、家族を求めて探し歩く人——きのうまでの山間の平和郷は一変して地獄と化したようだった。早く役場と連絡しようにも道路が押し流されているので手の出しようがない有様。しかも刻々とわかる死者の名前や行方不明を聞くたびに、山津波のツメ跡の恐ろしさをいまさらに知り、ふるえおののく人たちが多く、早く救援の手をさしのべなければ全員が飢え死ぬという状況だという。(伊那毎日新聞7月1日、1面)

深いため息、泥田に豆まく

中川村 ここは“陸の孤島”被害激じん地の四徳、桑原区は道路が寸断され、いまでも応急的にかけられた細い山道が一本通じているだけ。平家の落ち武者が住みついたという四徳へは、村役場から14キロ、その県道はいまだにズタズタ、陸上自衛隊の道標をたよりにガケ道を進む。赤ハダをめぐりとられた源平氏山が無気味に行く手にのしかかってくる。

世帯道具ナベとカマ

4時間後にたどりついた四徳区は、この山の谷底の部落だ。83戸の平和だった村落は一瞬にして17人の死者、行方不明を出し、8割の住家が全壊した。家も美田も川原に一変して、跡かたもなくなっている。今、川幅3~4メートルの小川に水がチョロチョロ流れていた。この四徳川が10数倍にもひろがって、あばれまわったとはとても想像がつかない。かろうじて

残った家には住む家を失った被災者が2~3世帯ずつ共同生活していた。災害救助法でもらったナベ・カマのほかほとんど身一つだ。何から手をつけてよいかわからないといった表情だ。土砂と流木でいっぱいの中川東小四徳分校を左に見て、かわらを登ったところで働いている農夫にあった。泥で埋った水田にあきらめきれず稲を抜いて豆をうえていた。農協支所をたずねると倒れかけた建物がそらだという。ここに災害対策本部があった。水害で奥さんをなくした農協支所長の小松正義さん(46)は「先日知事がヘリコプターで現地を見てくれた。復旧には県も最大の援助をするといっていた。耕地の73%を失ったが、みんなが力を合わせれば耕地もある程度は元のようになる……」と、いう。

移住にも不安残す

協業化の経営方式も考え、今ここであせらなくてもよいではないか、ともいう。だが、いつ道路が復旧するのか見通しはなく、あすのパンに困る26世帯が生活保護を申し出ている。また83世帯のうち33世帯が移住を決意、移住先は駒ヶ根市が29世帯、残る3世帯が伊那市、飯島町となっているが転職して生活できるかどうか不安は大きい。先祖から住みなれた土地を離れるのはよほど覚悟のいることだが小松近喜さん(36)は「このうえ台風でも来たらどうなるか。1日も早くこの土地を出たい。でも8人の家族が応急仮設住宅(17.5m²)で暮らせるだろうか」と顔をくもらせていた。

県道見込みなし

また小松区長は「林業が60%、農業は40%で年間3200万円の収入がある。山林は1戸平均12haあって四徳に残っても暮らせる。だが木材・薪炭の搬出も道路が開かなければだめだ」と、ため息をつく。

伊那建設事務所は、村役場とは逆方向の駒ヶ根市中沢から、懸命の道路工事を進め、折草峠(1148m)からまもなく小型自動車が四徳へはいるようになるという。だが四徳役場間の県道はいつ復旧するか全然見通しはない。それが四徳の再建を決める最大のかぎなのだが。(読売

新聞7月27日，6面信越版。伊那谷水害から
1ヵ月。伊藤，細川記者)

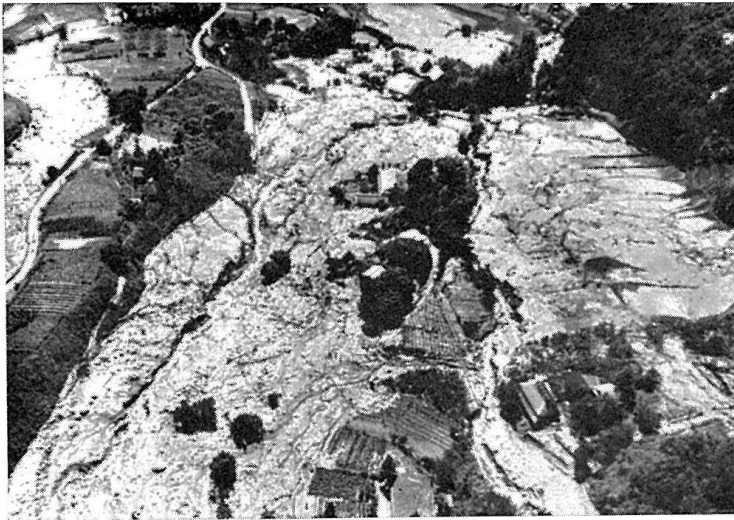
7. 災害地に生きる

NHKテレビ。「なぎ」昭和37年11月30日
午後8時～9時25分 水木洋子作放送〔第17
回芸術祭参加ドラマ〕

梅雨前線集中豪雨災害からちょうど1年目の
去る6月，中川村四徳部落に取材した書きおろ
し。自然・災害と人間との関係を，ひとりの水
害孤児を通して考えてみようというものだ。現

地で10日間ロケしたフィルムをふんだんに使
い，災害当時のニュースフィルムも織りこんで
いる。町の仮設住宅にあずけられた哲也（小学
3年）を主人公とし，おじの勇人，お婆のゆ
み，その娘やよい，息子米盛，その嫁その子，
山に半壊のまま残っている本家に，哲也少年は
工事用トラックに便乗して折草峠をこえ，谷底
のくすぶった家に，仁太郎じいさん，義成じい
さん，けさえばあさんをたずねて，少年の聞い
たことばは「なぎは，天災じゃのうて人災じ
ゃ」と，いうのであった，というあらすじ。

 * 復旧のすがた *



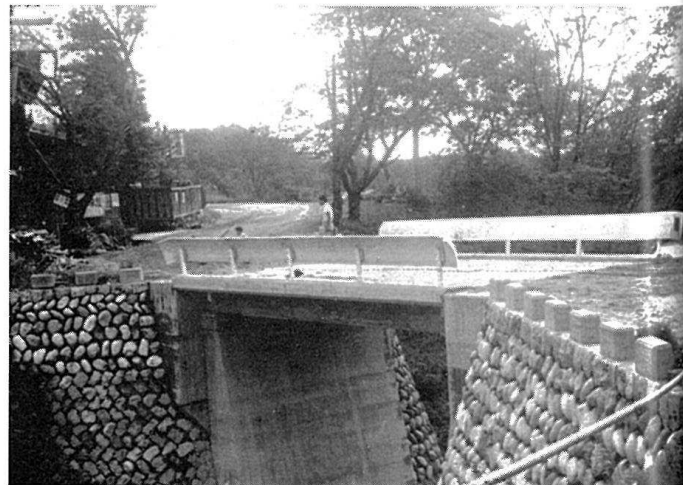
災害直後の大谷沢 (信毎提供)



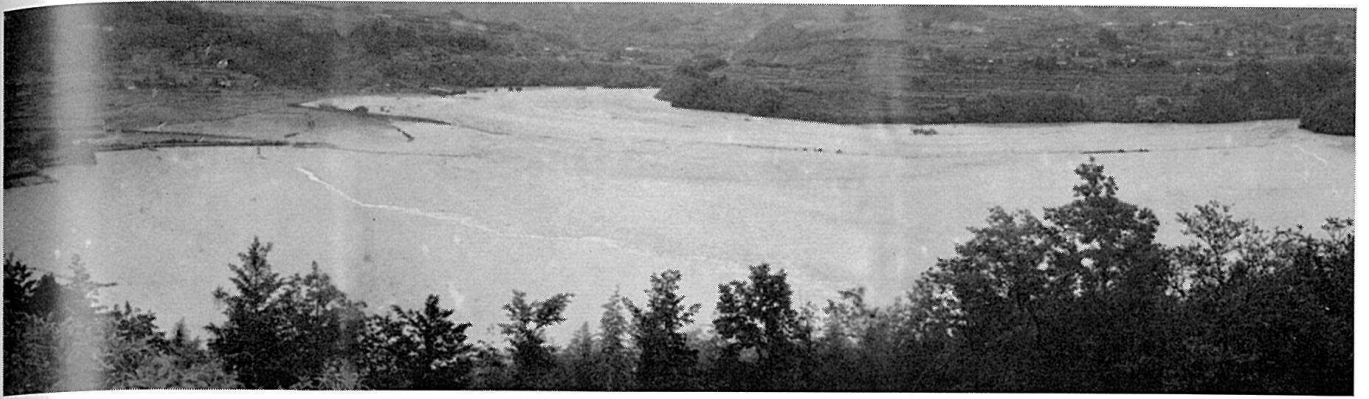
復旧後の川筋と水田



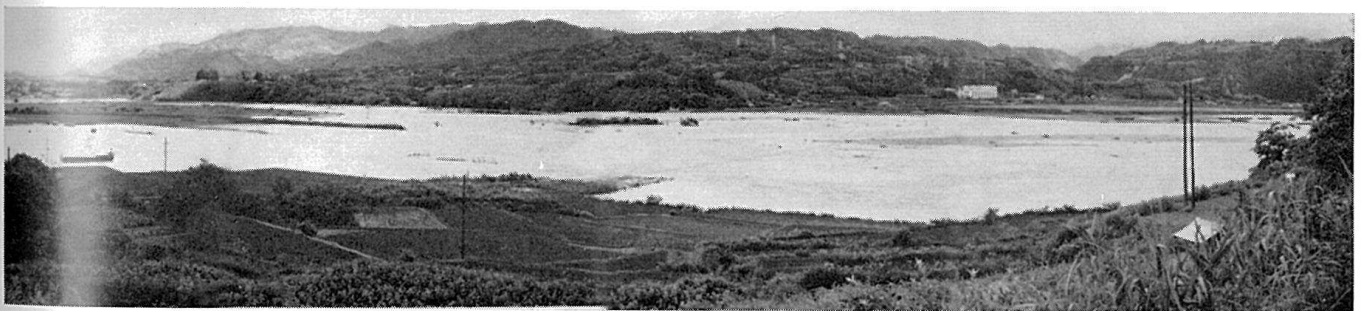
ほうらい沢の災害と復旧後の姿



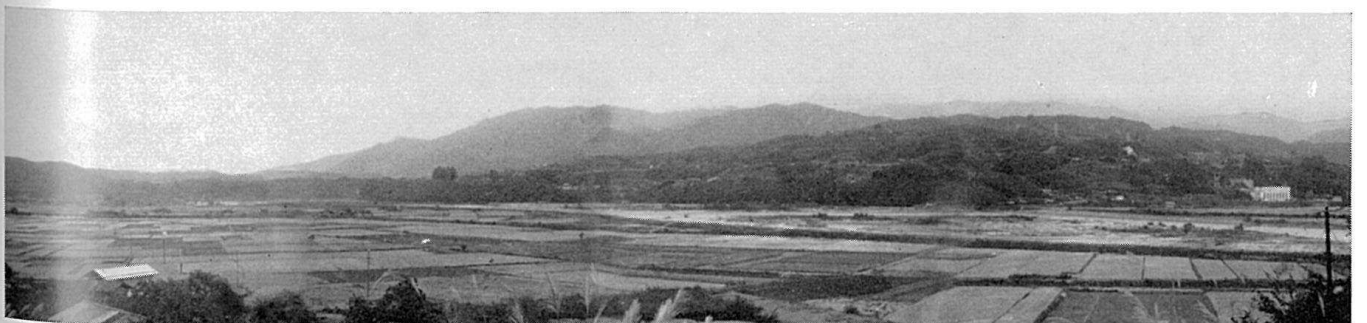
大谷沢に押し流された県道と新たにかけられた永久橋 (坂戸)



濁流渦巻く小和田 水中に線状に浮ぶのが堤防（上）復旧後の水田（下）

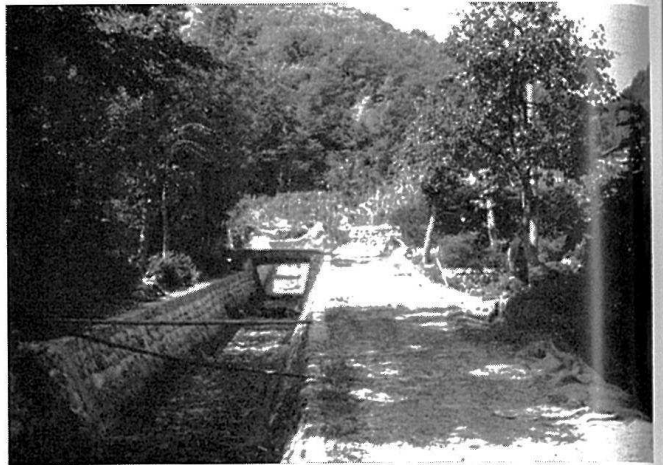


水びたしの南田島（上）と復旧後の姿（下）





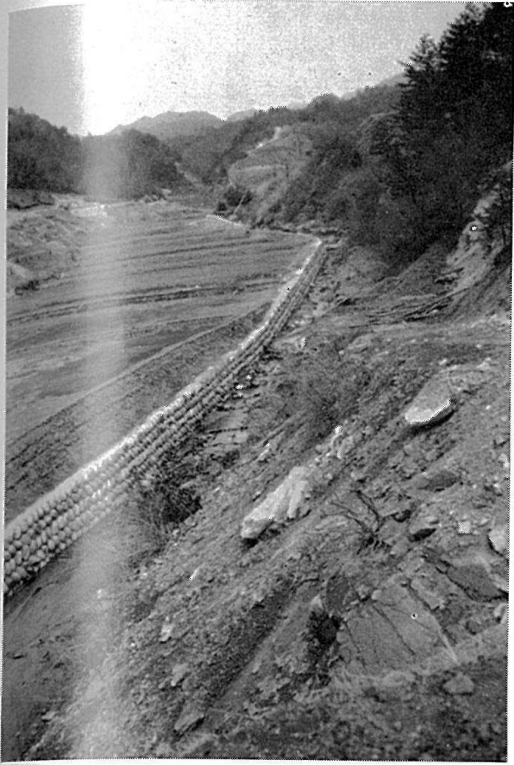
けっかいした前沢川護岸とさがり橋と復旧後



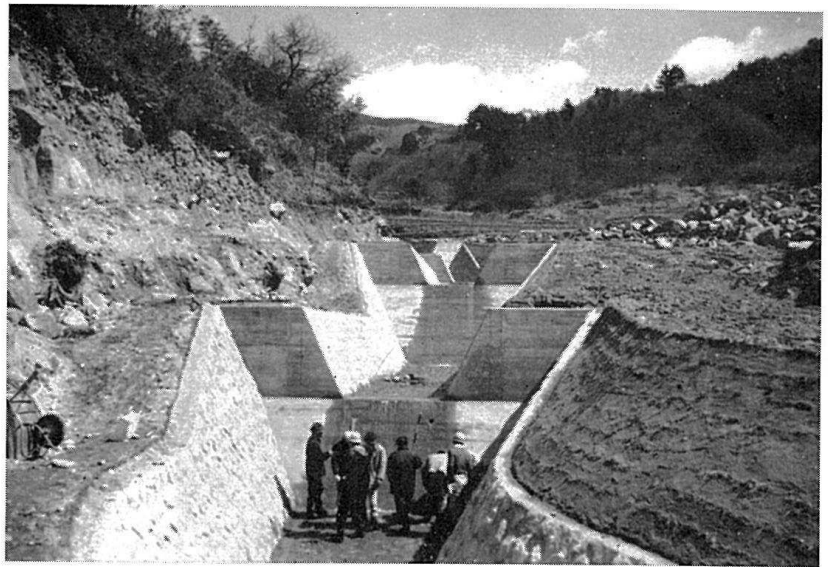
洞沢の復旧前後



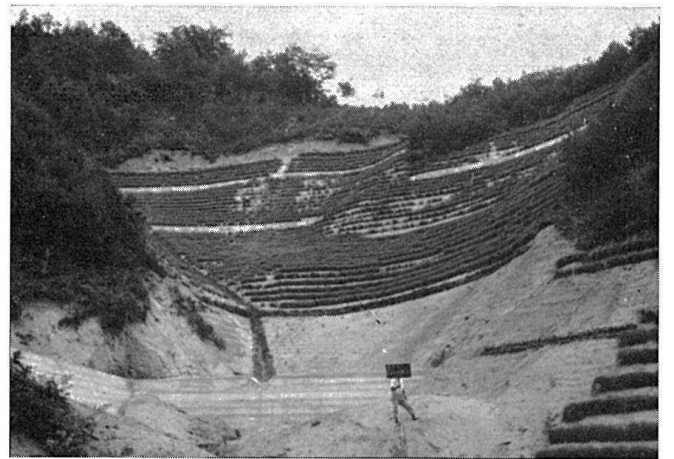
小和田天竜川堤防の復旧前後



井戸入沢耕地復旧



造形美の黒牛の復旧

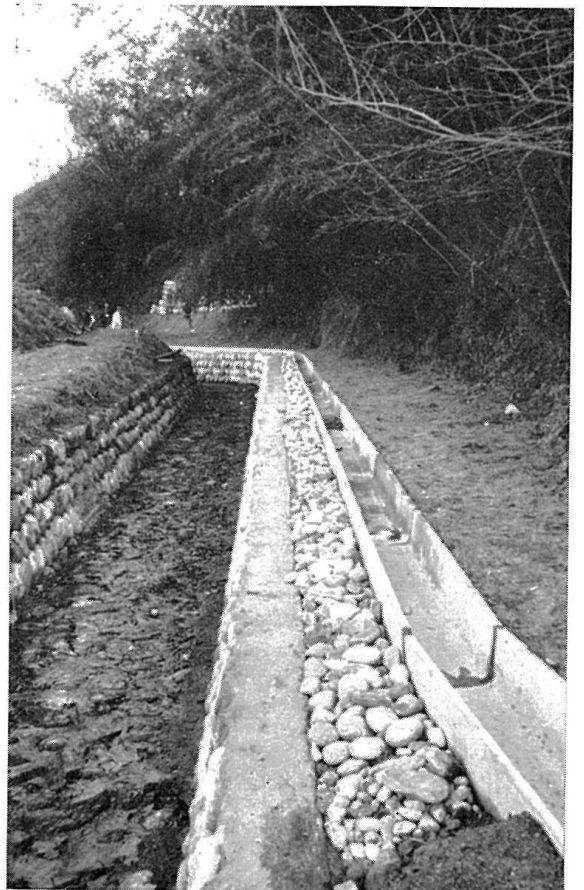


災害前(左)と施工後の国営砂防(一杯清水)



村地籍の道路と護岸

大谷沢の復旧後



—四徳川は復旧でき、道路も—

—大半もどおりになった。—

—しかし、居住不適地として—

—集団移住後は、住み捨てら—

—れた家に、無心にコスモス—

—が咲き乱れており、墓石も—

—たおれた草に埋もれている—

—“かたわらに秋草の花語る—

—らくほろびしものはなつか—

—しきかな”牧水の歌がしみ—

—じみと思いだされる—

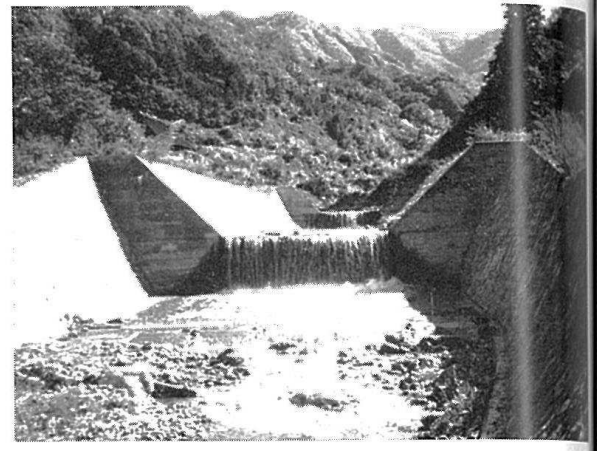
復旧成った四徳



下 村 附 近



小 河 内 え ん 堤



小 河 内



松川町上片桐に四徳から数戸移住集落をつくった



大 張



草 に 埋 も れ た 墓 石

第5編 復興のすがた

1. 36 災害による移住者

この災害のため、瞬時の間に家も家財も、又耕地も奪い去られ生活の基盤を失い、涙をのんで祖先伝来の墳墓の地を捨てて異郷の空へ安住の地をもとめて移住された人々の名前をここに残して、その前途の御多幸を祈るものである。



愛知県猿投へ移住した人の家

1. 駒ヶ根市

移住先	氏名	部落
原 垣 外	塩 沢 興 人	四 徳
"	小 松 定 一	"
"	湯 沢 豊 一	"
"	湯 沢 弘	"
"	小 松 久 雄	"
"	小 松 一 美	"
"	藤 川 久 雄	"
"	小 松 信 子	"
"	小 松 叶 喜	"
"	小 松 近 健	"
"	小 松 智 幸	"
"	小 林 亀 四 三	"
"	三 好 務	"
"	小 松 芳 男	"
"	竹 村 国 恵	"
"	有 賀 正 美	"

原 垣 外	塩 沢 一 市	四 徳
"	小 松 満 寿 男	"
"	小 松 義 美	"
"	青 木 弥 一	"
"	小 椋 喜 兵 衛	"
"	小 椋 信	"
"	仁 科 重 郎	"
"	小 椋 利 雄	"
小 町 屋	藤 川 寅 恵	"
"	小 松 智 文	"
飯 坂	小 松 喜 三 男	"
"	小 松 亀 雄	"
"	小 松 久 一	"
小 城	小 松 忠 人	"
"	小 松 恵 美	"
上 穂 町	小 宮 正 洵	"
"	小 松 千 代 治	"
北 割	小 松 安 男	"
"	小 松 茂 留 人	"
"	小 松 常 谷 男	"
"	小 松 兼 夫	"
富 上 富 上 伴	土 赤 山 須 平	"
"	小 松 茂 明 治	"
"	小 松 喜 藤 治	"
"	小 椋 源 一 平	"
"	村 松 万 男	"
経 塚	小 村 沢 茂	"
"	小 仁 科 公 定 人	"
辻 南 福 中 梨 福 市 市	南 原 岡 割 木 岡 宅 割	"
"	小 坂 本 桂 太 郎	桑 原
"	白 倉 沢 栄 一	"
"	倉 沢 三 五 郎	"
"	杉 本 金 太 郎	"
"	田 口 兼 夫	"
"	銭 沢 勇	銭

福岡	遠山末吉	桑原	上片桐	細川貞四郎	桑原
"	有賀一夫	錢組	原七上	山本岩雄	"
"	古沢原沢誠一	北桑原	上片桐	平沢保秋	"
経塚	萩松沢利比	"	"	大久保沢清忠	"
小町屋北野	荒沢川沢冬	"	"	白沢宮脇	"
赤須岡割	吉松沢渡倉	"	"	下若滝富蟹	"
福北	銭沢小	"	"	川森子	"
"	沢小	"	"	小坂	"
小町屋外	小松芳一	"	"	新井子	"
2. 宮田村	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	四徳	4. その他(県内)	小沢ふゆ	四徳
西大久保	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	伊那市	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	"	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	東春近	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	伊那市	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	"	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	七久保	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	諏訪市	小松松松池松林沢城藤松川	"
町一区	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	村内(中組)	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	"(南田島)	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	塩尻市	小松松松池松林沢城藤松川	"
河原町	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	飯島町	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	茅野市	小松松松池松林沢城藤松川	"
南割	小松沢川松松池下下松松羽松松村有有広中	"	飯島町	小松松松池松林沢城藤松川	"
3. 下伊那郡松川町	高松沢林松松松松小春	四徳	飯島町	小松松松池松林沢城藤松川	"
上片桐	高松沢林松松松松小春	"	"	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	高松沢林松松松松小春	"	村内(針ヶ平)	小松松松池松林沢城藤松川	"
元大島	高松沢林松松松松小春	"	飯島町	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	高松沢林松松松松小春	"	箕輪町	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	高松沢林松松松松小春	"	伊那市	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	高松沢林松松松松小春	"	村内(田島)	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	高松沢林松松松松小春	"	飯田市	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	高松沢林松松松松小春	"	村内(柳沢)	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	高松沢林松松松松小春	"	未定	小松松松池松林沢城藤松川	"
"	高松沢林松松松松小春	"		小松松松池松林沢城藤松川	"

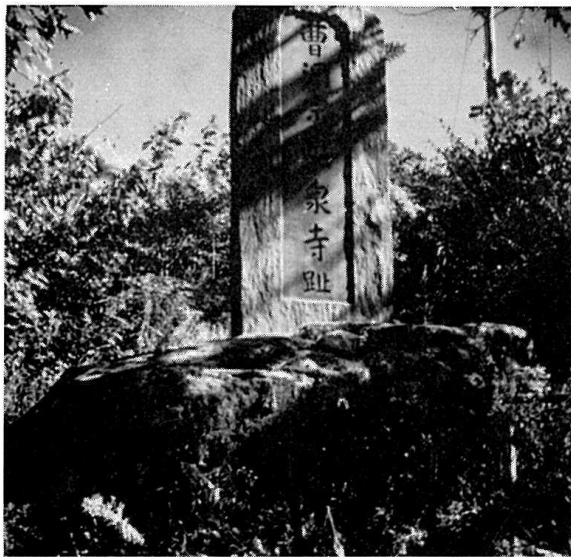
5. 県外

愛知県	井沢 瀬雄	桑原
"	森岡 金一	"
"	有賀 茂一	銭
横浜市	下沢 智広	桑原
"	鈴木 房雄	"
ブラジル	松沢 定一	北組
愛知県	小池 圭三郎	四徳
"	太田 政巳	桑原
"	宮原 清美	"
"	岩本 一夫	"
"	洪沢 忠治	"
"	初崎 千代一	"
"	古沢 貴幸	"
名古屋市	松沢 宗治	"
東京都	榎平 茂	"

2. 災害移住記念碑

四徳、諏訪神社に昭和38年災害移住記念碑が建立された。記念碑の表は「災害移住記念碑 長野県知事西沢権一郎」裏には「昭和三十六年六月二十七日 豪雨災害に遭ひ 集団移住特別措置法に基き国県が 耕地宅地を一括買上げ四徳部落は四百年余の歴史に名残りを告げ全戸他へ移住せり時に由緒ある左記のものを共有地として存置す

四徳神社境内及山林 七十五社山神跡山林



福泉寺跡の碑

湯の権現境内及山林 剣滝不動尊境内及山林
右管理者後記委員五名

中川村長 戸枝 馨 撰

禅曹洞宗福泉寺趾総持八十八瓏の裏の碑文は当山は常泉寺四世水山寿泉和尚を開祖とし寛永十七年十一月四徳に寺宇を建立し法灯を伝えること三百二十年余該地一円仏教と文化の中軸たりしも昭和三十六年六月二十七日豪雨災害に遭ひ全檀徒他に移住茲におわりぬ伝えて以て薫香を永世に留む常泉寺二十六世泰寿撰

3. 復興記念碑

水田の大部分に被害をうけた小和田部落では、復興の完成した昭和38年5月、復興記念碑を建立して碑文に次の記録をとどめて将来の記念とした。なお表は河野一郎建設大臣が揮ごうした

野辺にかげろう燃えるきょう わたしたちは非常なよろこびのうちにこの碑を建立する 荒れ果てた水田が立派によみがえり 各所の防災施設とりわけ天竜の護岸はどんな激流にもゆるぎないたくましさで完成したからだ 恐ろしい雨だった 昭和36年(1961年)6月下旬本土の上空にていたいた梅雨前線はおびたしい雨を降らせ ことに伊那谷に集中して数日間で520余ミリに達したこのため当地では27日夕方に三沢上流で土砂くずれが相次ぎ 28日未明には天竜川の護岸もいっきに打ち破られるなど 各所で建物を洗い 6年まえに改良なったばかりの20余ヘクタールの美田もドロの海と化した それでも雨はやまず 激流と半鐘が耳をつんざき寸秒後の生命に危険をおぼえるありさまだった これが正徳5年(1715)ヒツジ満水いらいの梅雨前線豪雨である国はただちに災害救助法を発動 短期復旧の方針を打ち出し 工事担当者等の大きな協力もあって 2カ年でほとんど復旧できたいま碑を建てるにあたり犠牲者がでなかったことをよろこぶとともに各方面のよき指導と絶大な協力を感謝しつつたすら郷土の平和と繁栄を祈る

1963年5月

小和田部落之を建つ

4. 道路, 橋梁, 河川の復旧

災害後は直ちに災害個所の応急措置を講じ、村民の不安を除くとともに交通を確保するために、県内外の土木関係職員の応援と土木業者の献身的な協力により1カ月後には県道は開通し、村道の桑原線北山方線も開通した。いっぽう、8月中旬には建設省の緊急査定を受け、9月中旬より緊急工事の復旧に全村あげて着手して以来3カ年間、女も老人も暑さ寒さにめげずひたすら復旧工事に努め38年度末までに85%を完成した。このため現在残っているのは四徳方面の護岸や道路の復旧だけとなり40年3月までには全部が完成する。

土木施設災害個所表 (村工事の部)

番 号	地 区 名	工 種	事 業 費 千円
101	手取沢第3工区	河 川	69,319 ⁸¹⁸
101の2	手取沢第1工区	"	13,846
103	飯 沼	"	4,223
104	大 谷 沢	"	88,162
1,369	三 ツ 沢	"	1,824
1,371	ほ っ ば 沢	"	806
1,372	寺 沢	"	684
1,374	大 曾 根 沢	"	1,188
1,375	賀 見 の 入 沢	"	2,311
1,377	峠 の 沢	"	2,394
1,378	四 徳 川	"	1,929
1,379	東 平 鈴 沢	"	1,527
1,380	半 の 入 沢	"	1,764
1,381	番 場 入 沢	"	12,124
1,382	村 松 沢	"	919
1,383	う る し が 沢	"	714
1,384	西 丸 尾 2 号	"	8,767
1,385	西 丸 尾 1 号	"	3,799
1,386	谷 田 沢	"	8,514
1,387	南 田 島	"	14,758
1,387の2	" 2 号	"	1,048
1,387の3	" 3 号	"	698
1,387の4	" 4 号	"	302
1,388	洞	"	3,223
1,389	小 和 田	"	5,914
1,389の2	小 和 田 2 号	"	739
1,392	銭 沢	"	1,705

番 号	地 区 名	工 種	事 業 費 千円
1,394	宮 の 入 沢	河 川	2,591
105	町	道 路	1,726
106	南 山 方	"	3,424 ⁶⁶⁰
107	中 上	"	1,295
108	外 出 1 号	"	343
109	外 出 2 号	"	377
110	又 洞	"	1,806
111	上 又 洞	"	456 ⁶⁰⁰
113	上 鹿 養	"	1,132
114	下 沢 尻	"	499 ⁸⁰⁰
115	沢 尻	"	3,183
116	上 沢 尻 1 号	"	432
117	上 沢 尻 2 号	"	821
118	上 沢 尻 3 号	"	928
119	上 沢 尻 4 号	"	581
120	鹿 養	"	2,504 ⁸⁸²
121	北 山 方	"	1,274 ⁶⁰⁰
122	井 領 田	"	316
123	神 又	"	420 ⁶⁰⁰
124	長 岩	"	3,469
125	谷 田	"	4,326
126	谷 田 4 号	"	279
127	上 垣 外	"	299
128	半 崎 1 号	"	691
129	半 崎 2 号	"	739 ¹⁰⁰
130	板 山 沢 1 号	"	1,259
131	板 山 沢 2 号	"	1,897
132	板 山 沢 4 号	"	826
133	板 山 沢 5 号	"	237
134	板 山 沢 6 号	"	694
135	板 山 沢 8 号	"	394
136	尾 梨 1 号	"	242
137	尾 梨 2 号	"	1,568
138	横 道	"	1,353
139	野 田 1 号	"	491
140	野 田 2 号	"	319
141	白 沢 1 号	"	672
142	白 沢 2 号	"	1,558
143	三 久 保	"	2,116
1,398	梶 間	"	578
1,399	上 梶 間	"	338
1,400	大 中 下	"	164
1,401	間 瀬 口 前	"	173
1,402	茶 道 ケ 沢	"	747
1,403	下 平	"	336
1,404	石 神	"	734
1,405	山 汀 1 号	"	193
1,406	山 汀 2 号	"	1,200

番 号	地 区 名	工 種	事 業 費
1,407	山 汀 3 号	道 路	742
1,408	深 沢	"	1,647
1,409	栃 山	"	287
1,410	上 栃 山 1 号	"	673
1,411	上 栃 山 3 号	"	1,142
1,412	西 丸 尾	"	414
1,413	白 久 保	"	555
1,414	飯 沼 境 界	"	836
1,415	丸 尾 入 口 1 号	"	261
1,416	丸 尾 入 口 2 号	"	234
1,418	二 軒 屋	"	1,385
1,419	上 小 河 内	"	968
1,420	鹿 養 坂	"	526
1,421	板 山 沢	"	327
1,422	上 栃 山 2 号	"	186
1,423	柵 田	"	940
1,390	北 林	"	2,723
101の3	手 取	"	264
144	前 沢 川 橋	橋 梁	1,119 ²⁶²
101の4	谷 田 橋	"	1,122
145	日 向 沢 橋	"	822 ⁷⁵⁹
146	前 沢 川 2 号 橋	"	306 ⁹⁵⁸
147	大 汀 橋	"	833
1,424	森 の 下 橋	"	461
1,425	新 屋 敷 橋	"	1,042
1,426	郷 士 沢 橋	"	752
1,427	青 木 橋	"	558 ⁶⁴⁴
合 計	102カ所		326,333 ⁶⁸³
河 川	28カ所		255,792 ⁸¹⁸
道 路	65カ所		63,523 ²⁴²
橋 梁	9カ所		7,017 ⁶²³

公共土木施設災害箇所表（県工事の部）

番 号	個 所	工 種	金 額	摘 要
45	坂 戸 橋 下	河 川	19,786 ¹⁹³	竣 功
1,684	飯 沼	"	5,164 ³¹⁶	"
1,685	坂 戸 1 号	"	3,705 ³⁸²	"
1,686	" 2 号	"	1,667	未 着
1,858	新 井	"	3,829	"
1,859	前 沢 1 号	"	321	竣 功
1,860	前 沢 2 号	"	600	未 着
1,861	前 沢 橋 上	"	771	"
1,862	前 沢 橋 下	"	1,047	竣 功
1,863	上 前 沢	"	3,434	"
1,864	上 前 沢 1 号	"	978	"

番 号	個 所	工 種	金 額	摘 要
70	日 向 沢 1 号	河	96,469 ⁶⁵⁹	竣 功
79	四 徳	"	397,343 ⁷²⁰	工 事 中
1,865	桑 原	"	73,298 ⁵⁹⁰	"
101	手 取 沢 第 3 工 区	"	40,321	"
101-2	" 第 1 工 区	"	15,489	"
小 計			664,224 ⁸⁶⁰	
2,118	北 堤 上	砂 防	673	竣 功
2,119	小 和 田	"	2,490 ³²²	"
2,120	国 道 上	"	1,225	"
2,121	" 1 号	"	284	"
2,122	" 2 号	"	854	"
2,123	" 3 号	"	1,683	"
小 計			7,209 ³²²	竣 功
296	除	道 路	11,079 ⁸⁵⁹	"
297	手 取 沢	"	5,241	竣 功
298	寺 坂	"	1,350	"
299	金 淵	"	567	"
300	仁 料 前	"	1,017	"
2,164	飯 沼	"	317	"
2,165	板 沢 1 号	"	277	未 着
2,166	" 2 号	"	1,425	竣 功
2,167	" 3 号	"	737	未 着
2,168	" 4 号	"	997	"
2,169	" 5 号	"	527	"
2,170	与 田 切 向	"	457	"
1,865-1	桑 原	"	158,530 ⁰⁵²	工 事 中
2,187	平 鈴	"	1,358	未 着
2,188	峠 1 号	"	1,111	"
2,189	" 2 号	"	539	"
2,190	" 3 号	"	230	"
2,191	峠	"	2,729	"
338	坂 戸 2 号	"	3,353 ⁷⁶⁶	竣 功
339	坂 戸 橋	"	12,406 ²⁰²	"
2,223	坂 戸 1 号	"	824	"
2,249	家 前	"	899 ⁹⁷⁰	"
340	舟 久 保 1 号	"	961	"
341	舟 久 保 2 号	"	1,966 ⁸⁸²	"
小 計			208,900 ⁷³¹	"
564	和 見 沢 橋	橋 梁	11,303	竣 功
565	手 取 沢 橋	"	3,149 ⁷²⁰	"
566	北 組 橋	"	2,261 ²⁹²	"
567	寺 沢 橋	"	8,233	"
568	葛 北 橋	"	3,464 ²⁴⁹	"
2,410	平 鈴 橋	"	1,862	"
575	北 林 橋	"	4,586 ⁷⁰⁹	"
小 計			34,859 ⁹⁷⁰	
合 計			915,194 ⁸⁸³	

建設省直轄工事（天竜川護岸堤防）

小和田	1,363m	72,640千円
中 村	506m	30,620
南田島	1,010m	43,350
合 計	2,879m	146,610

5. 耕地復旧

豪雨により耕地災害は大きく、河川ぞいにある水田の大部分は被害を受けた。従って無傷な場所は、横前、竹の上、小平、間柱、下平等で平常は水に苦勞をしている場所であった。全村に及ぶ被害は335ヘクタールに及びこれ等農地に付随せる農業用施設の被害は橋梁5、道路9溜池3、頭首工4、揚水機1、水路等89か所で、被害総額342,026千円という未曾有の大災害をこうむった。従って復旧不可能な部分や小渋ダムにより水没地となる地域又は、集団移住により、国が耕地、宅地等を買上げこれが130ヘクタールに及び、これらは四徳や滝沢の全田畑、洞村部落の95%で、復旧は不可能となった。その他天竜川の方線変更と、河川の拡張によるつぶれ地のため、北山方、南田島、中村等いずれも耕地の面積は減少したがその他は全部復旧した。さいわい国の災害救助法にもとづく高率補助の適用を受けるとともに県職員の指導と、県土地改良事業団体連合会技術職員の献身的な応援さらに、復旧工事に参加した多数の請負建設業者とが一体となってこの大工事を完成し得たもので絶大なる協力に深く感謝しつつ工事箇所を次にあげる。国庫補助率は南向地区農地88.1%、農業用施設95.6%、片桐地区農地87.4%、農業用施設93.9%である。これは旧村別被災額を基準とした補助率である。

箇所番号	地 区 名	工 種	事業費
1	大 谷 洞 (2)	田	603千円
2	" (3)	"	363
3	子 生 沢	"	263
4	大 谷 洞 (4)	"	1,135
5	前 沢 洞	田, 畑	3,959
6	神 田	田	377
7	東 端	"	328
8	小 和 田	田, 畑	9,391

箇所番号	地 区 名	工 種	事業費
9	釜 淵	田, 畑	221千円
10	中 央 (1)	田	1,131
13	中 通	"	611
14	中 央 (2)	"	551
15	北 田 (1)	"	1,972
16	外 記 島	田, 畑	9,208
17	熊 の 洞	"	358
18	外 出 洞	田	617
19	土 林	"	666
20	下 河 原	"	6,928
21	下 島 (1)	"	273
22	" (2)	"	133
23	葛 北	"	1,691
24	井 戸 入 (1)	"	4,276
25	" (2)	"	1,466
29	北 の 沢	"	794
30	北 島	"	7,696
31	八 の 田	"	609
32	間 柱	"	225
33	柳 沢	"	1,565
34	鹿 養	"	2,095
35	雨 堤	"	1,829
37	深 沢 (4)	"	323
38	大 中 洞 (3)	"	2,949
40	山 口 田 (2)	"	165
41	馬 場 坂	"	151
42	深 沢 (1)	"	829
43	西 丸 尾 (3)	"	424
44	芦 原 (2)	"	423
45	兎 沢	"	1,046
46	栃 ケ 洞 (1)	田, 畑	4,175
47	大 谷 洞 (1)	田	518
48	三 久 保 (2)	"	2,642
49	手 取 沢	"	1,777
50	半 崎	"	752
51	芝 森	"	606
52	神 又	"	180
53	板 山 沢	"	1,512
54	竹 原 (2)	"	1,061
55	南 山 方	"	12,726
56	黒 牛 (3)	"	2,165
58	竹 原 (5)	"	343
59	銭 沢 下	"	566
61	銭	"	620
62	谷 田 (4)	"	1,309
63	" (5)	"	809
64	" (6)	"	1,626
66	飯沼下河原	田, 畑	4,454

個所番号	地区名	工種	事業費
68	山の田	田	222千円
69	堀切	"	266
70	経塚平(2)	"	140
71	沢の田	"	178
72	経塚平(1)	"	192
124	長岩沢(1)	"	421
133	"(2)	"	700
136	"(3)	"	506
161	経塚平	"	530
183	薬師	"	245
12	神又北田	水路	386
75	小和田	道路	947
76	旧井	水路	289
77	新井	"	406
78	原田	溜池	152
79	上新田	水路	295
80	深沢	"	7,646
81	針ヶ平	道路	291
82	阿坂	橋梁	343
83	大中洞(1)	水路	8,823
84	"(2)	"	8,299
85	中村	"	296
86	新井下	頭首工	2,235
87	古瀬	"	450
88	馬場坂	水路	1,991
89	外記島(2)	"	5,560
90	"(3)	橋梁	167
91	黒牛(2)	水路	120
92	石原田	"	1,107
93	芦原(1)	"	1,401
94	八幡沢	"	799
95	下堤	"	873
96	権現	"	409
98	内城	"	685
100	北島	頭首工	3,667
101	北の沢	水路	3,552
103	上垣外	溜池	604
104	苦木沢(2)	水路	569
105	高垣外(3)	"	515
106	"(1)	"	155
107	"(2)	"	264
108	中垣外	"	374
111	北島	"	2,560
112	間柱	"	288
113	鳳来田	"	368
114	若宮	"	283
115	樋ヶ入	"	2,449
120	兎沢	"	6,325

個所番号	地区名	工種	事業費
121	栃ヶ洞(2)	水路	395千円
123	大谷洞(1)	"	2,790
125	飯田田(1)	"	155
126	阿坂	道路	315
128	飯田田(2)	水路	307
130	長岩沢(1)	"	8,115
132	前田井	"	273
134	長岩沢(2)	"	10,922
135	"(3)	"	402
137	栃ヶ洞(1)	"	734
138	谷田(1)	"	572
139	"(2)	橋梁	587
140	"(3)	"	280
141	神又	"	1,024
142	栃ヶ洞(3)	水路	772
143	"(4)	"	554
144	板山	"	4,061
145	野田(1)	"	191
146	"(2)	"	178
147	沢の田	"	5,263
148	西丸尾(1)	"	4,271
149	"(2)	"	6,158
150	飯沼下河原	"	2,263
152	一本木	"	123
153	三丁井(1)	"	215
154	"(2)	"	154
155	黒牛(1)	"	21,044
159	飯沼天竜井	"	1,167
160	下輪(1)	揚水機	530
163	銭沢	水路	12,838
164	竹原(1)	"	3,823
165	三久保(1)	"	8,098
166	北田(2)	"	2,256
167	下河原	"	1,199
168	井戸入	"	1,074
169	小和田(3)	"	2,344
170	井戸入(1)	"	(1,940)
171	下輪(2)	道路	131
172	"(3)	"	140
173	井戸入(2)	水路	1,624
174	大谷洞(2)	"	2,615
175	尾上	"	1,216
176	鳳来沢	"	(1,880)
180	山口田(1)	"	1,272
181	山口田	溜池	288
184	西ヶ洞	水路	2,958
185	大黒沢	"	427
186	南山方	水路	(1,491)
			10,411

個所番号	地区名	工種	事業費
187	栗生沢	"	336
188	中村	道路	594
189	矢村沢	水路	794
190	苦木沢(1)	"	1,681
191	小和田(2)	"	323
192	手取	道路	1,050
195	柳沢(3)	水路	1,483
196	下平	"	1,778
197	苦木沢(3)	"	259
198	深沢(1)	"	4,373
199	中通	"	638
200	入の田	道路	612
201	前沢洞	水路	694
202	中央	"	352
203	仲林	"	1,103
204	尾崎	"	444
205	桑の木田	"	534
206	竹原(3)	"	404
207	"(4)	"	166
209	菅田(1)	頭首工	1,309
210	"(2)	水路	387
211	銭沢下	"	3,328
212	空久保(1)	道路	306
217	谷田(7)	水路	129
219	雨堤	"	2,281
	合計	177カ所	341,520
	農地 66カ所		108,885千円
	施設 111 "		232,635

6. 治山・林道の復旧

豪雨により林地及び林道が欠かいし、土砂の流出による惨状は目を覆うばかりであったが、



四徳区有林を国で買い上げたその治山林道

この大災害発生のもととなった林野荒廃地復旧については、国・県営により着々と工事が進められ、本年度をもって、約50%の復旧が完了した。又、林道の被害は、10路線、46カ所に及んだが今年度をもって全部の復旧工事が完成する見込みである。

治山関係災害復旧箇所表（国営工事の部）

施行箇所	面積	事業費
峠の沢	1.51 hr	6,035千円
クズガクボ	0.83	1,479
せとの沢	0.84	1,825
湯の沢・三つ沢	0.61	3,600
小屋の沢外		4,840
山の田沢		1,100
飯沼		2,100
黒牛	1.44	8,732
ウサギ沢	0.44	2,840
釜ブチ	0.36	2,590
トヨガ沢		1,150
西ケ洞	0.77	6,488
大仲洞	0.68	4,720
鹿養	0.28	404
入の田	0.39	490
焼綿	2.58	10,684
井戸入	1.82	8,093
板山沢	1.57	2,463
空クボ	0.35	4,620
峯	0.23	4,010
泥クボ		1,155
平鈴	1.46	6,261
半の入	1.91	6,760
加見の入	2.75	7,861
沢の入	1.90	5,911
小しんずい	0.44	3,000
黒尾沢	0.95	3,794
番場入	1.65	3,650
能徳・勝城	1.28	2,480
輪美沢		1,300
長岩洞	0.36	950
とちケ洞	2.01	5,980
間遠洞	0.48	3,580
細久保	0.25	1,757
尾窪沢	0.36	1,520
柳窪沢	0.16	1,800
三窪沢	0.98	4,116
銭沢	0.39	2,470
洞	2.37	5,400

施行箇所	面積	事業費
大谷洞		1,170千円
深沢・ホウライ	1.44	2,660
四徳(植栽)	(6.80)	3,000
大草(植栽)	(10.00)	3,320
四徳治山運搬道	3,000m	17,386
合計		175,544

治山災害復旧箇所表(県営工事の部)

施行箇所	面積	工事費
姥ヶ懐	0.50 ^{hr}	1,694千円
とちヶ洞	1.20	2,997
坊林	1.50	4,684
洞ヶ沢	0.10	1,739
クズガ久保	0.50	3,413
宮の沢	0.30	1,930
川越場	0.50	4,350
熊の洞	1.20	3,265
樋ヶ沢	1.00	2,163
半崎東	1.20	2,150
間遠	0.40	4,182
樋ヶ入	0.10	340
日向山	2.20	5,397
子生沢	0.10	733
蟹沢比良	0.10	2,210
北洞	1.50	2,450
矢村沢	1.30	1,812
小檀	0.70	3,644
北比良	0.50	3,280
合計	14.90	52,433

林道施設災害箇所表

路線名	延長	金額	摘要
峯銭線	916	9,559千円	竣功
矢の沢線	519	3,561	"
丸尾線	12	57	"
矢の沢線	22	152	"
峯銭線	6	76	"
宮の沢線	18	99	"
中通菅久保線	510	5,426	"
宮の沢(支)線	41	1,400	"
宮の沢線	25	547	"
鹿養梅ヶ久保線	64	462	"
北比良線	228	2,473	工事中
合計		23,812	

第6編 手記 編

雨 襲 ふ

斎藤 史

◎もとより富まぬ 山国人の 背に重き 豪雨おそへば 支へがたしも
◎低くこごみて 泥砂を掘れり いのちさへ 家さへ失せし くるしみの顔
◎つねに脅えて くらすわれらか 山河の せまきあはひに いのち保つを
◎くるしみ多き 小さき島国に われら生き たのむべき政治 待つ声多し

〔信毎〕7月1日、長野市歌人〕



伊那谷の災害に奇せて



駒ヶ根 仁科 定吉

伊那谷

をおそった、梅雨前線豪雨災害を追想して感想をのべてみたいと思います。

連日降り続いた雨は、6月27日正午頃より集中豪雨となり降雨量は何百ミリか計ることができぬほどで、水をあげ出すがごとく、ほとんど前面が見えぬという様相でした。たちまち河川は氾濫各所で山が崩れ、橋梁は押し流され、交通はと絶、全く危険の状態となりました。雨は、ますます強く降り続き、午後5時頃でしたか、私宅前の川の上流より黒山のような山津波（鉄砲水）があつまってきた、一瞬にして家屋等一切を濁流に押し流され、危く一家のものは裏山に逃れ、一命を助かったほどでした。

その頃

より相前後して各所で山崩れする凄絶な音が鳴り止まず、前面の河川の濁流に家がのまれるかと危険を感じれば、また後ろの山が崩れ、家は埋没され、全く進退きわまり、何れに去り、何れに逃れるべきか苦斗を続け、夜になっても、雨は一層強く、山崩れはその数知れず、山鳴りは続き、濁流に家を奪われ、また、山崩れに生き埋めとなったもの、家が倒れ下敷きとなり、あるいは押し流され、

尊い人命を失ったもの、逃げ場を失い暗闇の中をさまよひ、親は子を、子は親を呼び泣き叫び、あるいは、危険を恐れ恐怖にふるえながら夜を徹した。その様相は修羅場のごとくでした。

翌朝

明くれば、雨はなお降り続き、家もなく、祖先伝来の田畑はほとんど埋没、あるいは白川原と化し、道路・橋梁は、影も形も止めず、山々は無数に崩壊し、昨日まで青々としていた山は全く赤く裸を表わし、見るかげもなく、一物も残さず皆無となりました。この災害で尊い命が犠牲となったことは、悲惨中の悲惨事で、遺家族の方々に深く同情して止みません。

当時

四徳は、86戸中63戸のほとんど多数が流失倒壊、半壊するという被害であって、いかに被害が甚大であったかが想像されます。今、想い起せば全く一夜の悪夢のごときもので、あの修羅場を思い、戦慄するものがあります。四徳の地は400有余年の歴史をもち、往時は四徳村として、旧戸長役場をおいた時代もあり、世帯数100戸、人口600人を数えた時もありました。山林原野2000町歩を有し、山林資源に恵まれまた、五穀豊穰、人心も極め

て円満であり、経済に恵まれ、まことに住みよい地でありました。

最近

交通の便もよく、通信機関・医療施設等も整い、分校教育の施設も完備、中学の分室も設けられておりました。農民経済の中軸たる協同運動も、はやくから目覚め、大正2年、協同組合(当時産業組合)設立、その後昭和18年四徳支所となり、生産物の販売・生産、生活資材の購入、金融業務等一切を組合に委ね、産業経済の発展と文化の向上に大きな役割を果たしておりました。名実ともに桃源郷であったが、一瞬にして荒廃し、妻子を、親を、親せき知人を失い、阿鼻叫喚の地と変わり、田畑は山河と化し、一切の財産を失い、あるいは天がい孤独の身となり、再び復元困難とする悲哀の地となって、一生心に刻みこまれました。当時四徳の人は、ただ呆然として何のなすべき術も知りませんでした。ようやくにして整然たち上がり、復元のためあらゆる努力を傾倒しましたが、その被害が甚大であってこの復旧は容易ではありませんでした。また国・県および村当局が、あらゆる角度から復旧について検討をつくされた結果として国の施策として集団移住に対し臨時措置法等の措置が講ぜられ全戸移住の勸奨をうけました。

移住資金

就職、生活等の問題、故郷への愛着心等々、これが移住に踏みきることは、とうてい困難で、全戸が納得一致するまでには、その間の事情は複雑多岐であったが、しかし目前の惨状をながめ、復旧が困難

であり再度この惨事を後世に残さぬ事等、さらに、今や時代は、文化の向上発達にともない、将来子弟の教育等を考慮して、この際困難を克服し、断固全戸移住の余儀なきに至ったのが当時の実情であります。

駒ヶ根市

宮田村・飯島町・松川町その他それぞれ第二の郷土を求めて移住し、各自生業を求め、将来への望みをかけ懸命に努力を重ね、既に4カ年の歳月を過ぎました。いま過ぎし当時を追想、四徳の過去を顧みれば400有余年、祖先伝来墳墓の地は忘れ難く、かつては一村であったこともある経済的にも恵まれ、人心も円満にして、地域の生活環境もとのい、発展途上の地が、全戸移住して一人の住むものもなくなった事例はいまだかつてみず、いかに災害といえ、世の変転のきびしさであり、いま往時を偲び懐しくまことに感慨無量であります。

以上は

主として四徳についてのみの感想であります。中川村内でも、他の部落に災害激甚地が多く、また尊い生命の犠牲者もあり、まことに悲惨事でありました。村でもこの復旧には多大な経済的支出と努力を要したことと思いますが、今日復興の難事業が立派に遂行された事をお喜び申し上げます。

終りに臨み、この機会に、この災害について、私ども四徳のため多大なご配慮、ご好意をおよせくださいました村当局および関係機関その他の方々に深く感謝を申し上げます。



す い が い



四とく1年 小松あきえ

きょう、川の水が、おおくなりました。きゅうしょくをたべていたら、ちむら先生がきて「小さい人は、さきに、かえったほうがいい。」といいました。そしておとうさんや、おかあさんが、おおぜいむかえにきました。わたしは、ふみえと、おかあさんがきました。うちへかえったとき、ふみえは、なきだしました。

わたしとふみえは、たんすから、わたしとふ

みえのきるものをふろしきへ、つつみました。らんどせるもしよって、だいどころにすわっておったら、おばあちゃんは、なんとかいって、おがんでいました。おかあちゃんは、「おとうちゃん、はやく、こんかなあ」といいました。「えんの下へ水がはいってきた。」とおかあちゃんがいったとき、「みんなおみやえにげろ」とおとうちゃんがかえってきて、いいました。おばあち

やは、「おじいちゃ、はやくおいで。」といました。くらがながれるとって、おかあちゃんちは、くらからだしたり、うちからだしたりしていました。おとうちゃんも、おばあちゃんも、はこんでいました。そのうちに先生も、ふとんをかっいできました。雨びっしょりで、おばけのようでした。おっかなくなってしまうました。えびすやのおばあさんたちも、ひなんしてきました。おっかなくなつてわたしとふみえは、ないていました。よるになりました。ごはんをたべるとき、あきえは、一ぱいも、たべませんでした。おばあさんは、なきながら、たべました。そのうちに、きたがいとが、かじになりました。ねっと思つて、よこになったら、なぎがきました。わたしたちは、また、うちのほうえ、にげました。

あさになりました。川のむこうで、ひかげの、ちゆきさんたちは、おはかに、にげていました。とくのりさんたちが、はしごをかけてすくつてやっていました。わたしも、川のむこうえ、わたりたいと、思いましたが、まへの川が、ひろくて、はしもながれちゃつて、わたれません。そのおひるごろ、しろくんたちがきました。まさしくんも、よしあきくんも、あかんぼうもきました。山をとほつてきたんです。わたしはちょっと、はづかしかった。ひるをたべていたら、山口やのおじさんがきて、山口や

のほうえ、わたらんか、とききました。わたしは、かんがえて「いく」と、いいました。わたしは、かすが先生に、おんぶつてもらつていきました。みつえおばさんが「あきえ、よくきた。」とつた。わたしは、うふふ、とわらいました。それから、さとみをつれて、上すがぬまえ、いきました。先生たちや、めぐみさんやわたしたちのともだちがいはいいたので、はずかしかったけれどうれしかった。みんなであそびました。

がっこうへいつてみたら、がっこうは、こわれて、つちがいはいで、こしかけや、つくえが、にわにころがつていました。まだ、がっこうは、はじまつていなかったので、みんな、見にきていました。すなわさをしてきました。ヘリコプターがきたので、手ぬぐいやしんぶんがみをふりました。

がっこうへいくよつになつて、たいそうばでべんきょうするよつになりました。それからあたらしいピアノやオルガンやもっきんがきました。うれしいなと思つました。そのとき先生はなきました。

わたしは、このあいだ、けいこさんが、ぬけていくとき、かなしかつた。いまも、かんがえれば、としあきさんも、ぬけていつた。かずこさんも、ぬけていつた。しげとくんもぬけていつた。かなしいと思つます。



災 害 地 四 徳



駒ヶ根 小 松 正 美

いつも清い流れ、耕地に対しては灌漑を、そして魚も喜々として育ち釣糸をたれる人の姿も平和そのものの表現の四徳川。四徳の谷の中央を北より南に流れこれに添う山々、いつもながら山紫水明の里。その谷間に点在する家、田畑。農山村として生計をたて明るい部落。こういう地域のためか。人情こまやかにまとまり理想郷四徳の里。しかし年ごとにこのやさしい四徳川もあばれ、道路や橋梁に災害を与へ、いつも村当局へ迷惑をかけてきました。また村役場から余りにも遠隔の地の悲しさ、教育文化の

面、また経済面等村や農協に無理な御世話を受ける里でした。これではならないと農業改善に部落こぞつてふるい立ち35年には供米900俵、また養蚕も重点的に企画し換金作物としてこんにやく玉生産に力をいれ大体軌道に乗り、山林経営も薪炭稼動収入のみに頼らず植林事業の大幅取入れ、しいたけ栽培の研究等山林経営に一段の工夫をなし、山野牧草による大小家畜飼育等を行いつつありました。しかるに36年6月27日夢想だにしない恐ろしい奈落の底へつき落された。山はいかり、谷はあばれ、この四徳

の里も一瞬にして自然の暴威の前一切はくづれさり、豪雨とはこんな恐ろしい魔者かと茫然とし、住み慣れた家も、農地も道路も衣類も食物もみんな一瞬にして流れ去った完全被災者と、そうでない人とできてしまった。自然とはいえ悪魔のしわざ。鎌倉時代よりとか、長い歴史をもつ郷、このつちかわれた歴史により人の和を喜びとした土地。この時こそ第一に人の和によらなければならないとみんなさとした。

この大災害に、献身的に御指導また鞭撻して下さった村当局、やっと生きる喜びを持ち出しました。また関係官庁の皆様の方ぞえ等筆舌につくしがたい御世話を受け、泣けてなくてうれしさ一杯でした。人間一度ほんとに困った時程、人の情の身にしみるものです。哀れな事ですが、その味わいを受けた私は、涙にむせびながら人の子に生まれた喜びをかみしめました。再興の望みも絶たれ、他の市町村へみじめに出て行く人たち。夫は配給でもらった毛布衣類食糧を負ひ、妻は幼児を背に、また子供の手をひいたその足もとを見ればチンバの穴のあいた地下タビ、子供は色の違った運動グッズをはいて自衛隊の皆様で作って下さった道に杖をついて、どうか宜しくと涙の中に出かけて行ったこの悲痛な気持は、おのおのが一応覚悟を腹のそこに

刻んでいるかのように見えた。荒れ果てた田畑、夜がくれば家内中で生きる相談、子供の教育、移住先それからの生活等々。翌日は役場のみなさま、地方事務所、また警察官、関係官庁の方たちに相談した。家のなくなったおおくの人は、住と就職に都合のよい応急仮設住宅を心配していただいた駒ヶ根市へ移住を決意した。この間、農地・河川・道路と測量がはじまりましたが、どう考えても、四徳に永住できるかどうかという大問題にぶつかり、山小屋の住まいならとも角、人間として生活するにこの危険の多い谷間。いつまた豪雨で災害が起るか、そして町からも、村からもこの遠隔地、しかも学校教育だけを考えてもどうにも仕方ないと、誰も考え話しあいしていた。その間にも、だんだん家族ぐるみ移住にふみ切って出て行く。ついに37年6月、四徳全戸移住を決意した。一切の手続き等を役場へ依頼しました。永年住みなれた土地を、災害のためとはいいいながら、身のさかれる思いでした。人生とは夢かも知れない、一生には、いろいろあるものです。

昭和38年3月を期して、中川村の皆様、永い間お世話様になったお礼を心から申しあげて、それぞれの移住先へ参りました。



濁流をロープで



四徳渡 渋沢かずゑ

(前文略) 突然、自衛隊の方が2人見えた。頭からビッショリぬれた姿である。どこからどうやってきたかびっくりした。親切にいろいろたずねてくださった。聞けば、あの四徳川の濁流を、ロープにつたわって胸までつかって来てくださったそうです。何と、もったいない。

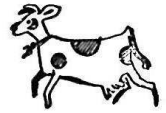
わたくしどものためにあの危険をおかして安否をたずねてくださった行動に、ただありがたく、嬉しく、とめどもなく涙がこぼれてしかたがありませんでした。「また来るから」と、いって帰られたが、まもなく近所の消防団の方と

いっしょに来てくださって、どこでつくったか、あたたかみのあるおにぎりをごくださった。幼な児をかっぱにくるみ、家族4人、岩山のうえで、雨に濡れて一夜をあかしたわたくしたちには、終生忘れることのできない尊とい味であった。中学へ通っている子供も無事であることが知らされた。「気を落さず元気であるよう」力づけて帰られるうしろ姿が、なみだにうるんだわたくしの目にボウーッと消えていった。

(中川東婦人会文集「なかが和」創刊号)



子どものくつをしっかりと



黒牛 宮下 かつ 彥

(前文略) ほんとうにアッという一瞬、無気味な地ひびきが雷のような音と化し、家の中にどろ水がドドーッとおしよせ、子どもと共に裏にとび出したが、もう膝まで泥に埋まり、身動きができない。どうやってはい上がったかおぼえがない。篠つく雨の中を流れてきた流木につかまり、命びろいをしました。雨とやみの中で顔は見えないが「おじいさーん……お父さー

ん…。」と呼んだのが泣き声になっていた。「おるゾーッ。」と大きな声のした時の嬉しさ。「アアよかった。お父さんも、子どもも、牛も、みんな生きていた。」顔を見合った時は胸がジーンと熱くなり、目は涙にうるんで何も見えません。

フト気がつくと、わたくしの手には子供のくつがしっかりとにぎられていた。「なかが和」



私の災害日記



西中学校2ノ1 寺 沢 明 子

6月27日

6月27日の5時間目だった。放送で「先生方は至急職員室へ来て下さい。生徒は教室でまわって下さい。」と言った。みんなわいわいさわいでいた。小学校の人達はもう帰っていた。それから授業をやめて体育館に集まった。小和田の人は針カ平を通っていった。先生は鳥山先生だった。洞坂まで来たら洞ノ沢と坊ノ沢へ行く水がすごかった。道もくずれて50センチ位あいていたきりだった。どうやらこうやら家についた。どんな道を通ってきたか、どんな所をきたかなんだかわからなかった。家の横の川(洞ノ沢)はすごく荒れていた。道もくずれかけていた。おかあちゃんもおとうちゃんも秀人兄ちゃんも仕事に出ていた。カバンもふくもみんなびしょびしょだったのでできがえた。その夜はおっかなくてねられなかった。愛ちゃ達は「ねれんわ」と言っておきていた。私はいつかしらんまにねてしまった。

6月28日

おとうちゃんが「水がくるかもしれんで起きとれよ。」といった。私はおかあちゃ達と避難する用意をした。それから愛ちゃと川を見にいった。大人の人達は気ちがいのように大きな声で「おーいこっちこいよう」とよんでいた。夜、

てつやでもねむいような顔をしていない。

川の水はもうすぐ橋を乗り越える位だった。水が橋を乗り越えてきたら水が家に入って来る。その日の9時頃だった。ガラガラゴウーゴウーともものすごい音がした。私は、はっとしてしょうじを明けた。そしたら堤防が切れていた。私はおどろいてそのまま見ていた。川で働いている人達も仕事をやめて見ていた。おとうちゃんが田んぼが流れる時「あれ見ろ田んぼが流れちまうに。」と泣き出して泣いていた。私は見るのがこわいような気がしたが見ていた。麦はざがしょうぎ倒しみたいにくけていくのがあれば、まんなかすぽとぬけて流れていくのもある。みんなバカみたいに口をポカンと明けてただ茫然として見ているばかり「なんとかならないのか」と心の中で思っていた。くやしくなるやら悲しくなるやらなんともいえない気持だった。高いお金をかけて肥料をまいていっしょうけんめい働いて作った麦、稲なのに水にとられてしまってくやしい。北の方の田んぼは青々とした稲がうわっている。私は「どうせなら小和田の田んぼがみんな流れてしまえばよいのに」と思った。

さっき見た時は堤防が10メートル位切れていたが、たちまちガラガラと200メートル、

300メートルと切れていった。その速さといったらおどろいてしまった。なんといってもこの日は忘れられない日だ。この日は家の中が暗いような気がした。

6月29日

朝起きたら雨があまり降っていなかった。四軒で御見舞に来てくれた。夕方秀人兄ちゃんが「山があぶねえでだいじな物はみんな倉にしまって学校へ避難しな」といった。初めはおかあちゃんが「山本屋だって家にかんばっておるし大洞だっておるもんでいいじゃねえか、死ぬときゃいっしょよ」と言った。なんだか心細くなってきた。愛ちゃと君ちゃは横前のお友達の所へ行く、私は学校へ避難する。お母ちゃは家にかんばっておる。みんなちがうので、ねっからきまらなんだが、けっきょく学校へ行くことになった。テレビや洗たく機やフトン、ミシンなどみんな倉に入れた。

チーコ（ねこ）はなんにも知らんような顔をして家の中で飛び回っていた。私はチーコが心配だったので「おかあちゃチーはどうする。」おかあちゃが「チーは、あんじゃあねえわ、水がついてきたらおとうちゃ達に倉に入れてもらわあいいわ」といった。そしたらお父ちゃが「チーはお父ちゃといっしょよ」といった、愛ちゃ達が外に出ていったので私はチーに「チーあんば」といって外にとび出していった。道で通る人が「学校へ避難かな、へえしょうがねえなん手のつけようがねえじゃんかな」とがっかりしたようにいう。

学校の会議室に行ったら沢山来ていた。みんなにあいさつして室の中に入っていった。私のクラスの人達は久美子さんと節夫さんがいた。つねちゃが南向の方の様子をいろいろと話してくれた。一ばんおどろいたことは、人間がそこらじゅうにひっかかっておるけれど水が沢山なのでたすげれない。というのがいちばんびっくりした。「それに比べると、私は家もあるしみんな無事だったでいいなあ」と思った。それからいろいろ話をしてくれた。8時頃おの下のおばさん達が来た。貴美ちゃんとさんざからかってあそんだ。まだくちゃくちゃ何か食べている所もあればペチャペチャ話しをしている所

もある。電気をけしたのでねたが少しもねむれなかった。貴美ちゃんがちょっともねむらないので千恵ちゃがだいて外に出ていった。

しらんまにねてしまった。1時頃起きてしまった。お母ちゃが「もう3時間くれえのものだらよ早くねろよ。」といった。30分ばかりうとうとしていた。足の方がかいくなくなってきた。「カがさしたんだな」と思った。それからはかいくてねれなかった。4時になったのでふとんはみんなおいて家にかえってきた。かえって来る時胃がチクチクとともいたかった。「きのうあわててごはん食べていったもんでかな？」と思った。早く起きすぎてまだねむかったので秀人兄ちゃの横へねた。

6月30日

朝起きたら愛ちゃ達はもう工場へ行ってしまったあとだった。この日は少しよい天気だった。5時頃牛を買う人がきた。私が「おかあちゃ牛をうるの？ 黒い方の牛うりゃあいいじゃん、赤い方の牛はだせんもんで赤ん坊生んだら出せるに」といったら「黒い方の牛はだめよ組合のだもんで家の牛じゃねえもんで出せれんよ」と言った。牛がつれて行かれる時おとうちゃが「いいところへ行ってうまいものをもらえよ」といってせなかをポンとたたいてやった。

今夜は学校へ避難しなかった。君ちゃと2人で学校へふとんを持ちに行った。

7月1日

朝から雨が降っていた。おかあちゃは集会所にお手伝いに行った。つよく雨が降ってきた。お母ちゃが「美佐ちゃや良ちゃが学校へ避難するで明子もいくか？」といいに来た。私はすぐしたくをして美佐さんをよんだ。美佐さんはリュックをしょって来た。良子さんをよんだ。可愛いねこの子がおったさんざからかった。高ちゃもいくらしい。会議室の中にはまだ荷物がいっぱいおいてあった。ドッチボールをした。いやになってしまったので会議室にきた。島屋のみっちゃがきた。三人で勉強をした。数学のドリルをした。美佐さんもしているようだ。そのうちに天気になってきた。「かえるか」と良子さんがいいだした。「もう少しおりめえ」と私は言った。こんどはカンカンないい天気にな

った。良子さんのおばさんがむかえにきたのでかえるようにした。荷物はおいてきた。ヘリコプターがいたりきたりしている。いろいろの話しをしてきた。ポンプ屋まできたら大人の人

達が竹でなんかしていた。家にかえってきたらお母ちゃんが「へえかえってきたのか」といった。



恐ろしかった集中豪雨

南田島 主 婦

恐ろしい集中豪雨に、私の家でも大きな被害を受けました。6月27日、前々日から降り続いた雨は、昼すぎから一層強くなって大変なさわぎとなりました。

主人はすぐ外へとび出していきました。私も雨仕度をして、近くの水掃き口をさらったりしているうちに、間もなく日暮となりました。夕食の仕度をしなければおそくなる、と思うその時、「お母ちゃー早く来てー」と、とん狂な泣き声、何事かと、とんでゆくと、ああ何んと恐ろしい。水と共に泥やら木やらものすごい勢で流れて来て、たちまち泥海のようになりました。



おしつぶされた家から家財をほり出す

ここは危い、早く中へと、子供達を入らせ、あたりを見廻しても誰もいない、困ったと私も飛び込んだ。子供達はもうカバンを背負って真剣だった。すぐ行き先を教えて、自分は大切なものをまとめた。その頃はもう家の中も危険となった。ガラスや障子を破って土砂が中へ飛び

込んで来たのでした。危いそこの板戸を必死になってしめて、深い泥水の中を逃げだしました。それは1キロも離れた所にある大なぎの崩れと、ふだんは水の流れもない八幡沢の増水による決潰だったのです。1回目の土砂が細まったとき帰って見たら二室は、手をつける価値もなく、フラフラする足をふんばって、余る畳をあげ終る頃、上の方から、危い！逃げる！との大声に、もう駄目だとあきらめ、再びにげたのでした。

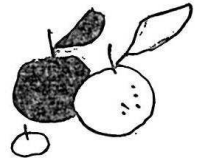
2回ならず、3回、4回とくりかえして来たあのすさまじさに、よく家が押し流されなかったと思いました。

その後、皆様の御協力で、後片付けが始まりました。やってもやってもみればみる程、いつになったら何とかなるのか知らず、不安な思いでした。

皆様方の、深い御協力と、深い御厚情に感激し、止めどなく流れる涙をおさえようもありませんでした。それはやがて心の復興となりました。まだまだ片付かない中にも、農作業もしなくてはと、原畑へ行くとき1年生の子が「俄雨が降りそうだと、僕1人で留守居はいやだなまた泥や色々くると困るで、どうすりゃいい」といいました。「もうこないよ」と言い言い登る道で見えるあの現場、もうこないと言いきれない不安な思いで見守りました。私のマスコット、愛用コンロはどこへ押し流された事やら、可愛想に！



災害を偲んで



東春近 小松慶夫

いまは、荒れ果てて人影もなく、変ぼう極まりない一部落跡となって、ただ、北から南へ、白い長蛇のような谷川が流れているだけの山里も、もここに500人の人が住んでいたのである。中央西側の小高い丘の上に法性神社があって、その前に、高さ3米位の青い仙台石の記念碑が建てられてむかしを物語っている。ここが私共の故郷、四徳である。様々の歴史や思出を秘めて、懐かしい限りである。

祖先の血と汗とによってひらかれてきた郷土、そのたゆみない努力には、ただ、頭が下るのみである。そして私どももまたこれをうけ継いで、あらゆる力を注いで郷土の発展を願い、立派な桃源郷を築こうと、区民一丸となって産業・教育・文化の興隆をおしすすめてきたのであった。

その郷土が、如何に天災とはいえ、一瞬の間に、あのような阿修羅場と化してしまったとは、郷土に対する愛着は誰でも変りはない。しかし、若い人達は、災害と同時に外へ出る決意をした。郷土を捨てたというより先見があったのであろう。春秋に富む若人の息吹きであり、新しい感覚の閃きでもあったのであろう。私共も追従的に意を固めて遂に全戸移住にまで進

展したのであるが、災害の恐怖、郷里への愛着、未知の地へ移住するという不安感等が入り乱れて前途は厚い壁に閉ざされていた。むかし、平家の落人の手によってひらかれたという伝説以来の長い幾多の歴史を振り切ってもこの難関を突破して新天地を求めなければならないのか、また将来子孫に千歳の悔を残すのではないかと、とさんざん煩悶の末、悲壮な決意で最後の断を下したのであった。懐絶悲惨な災害、何の準備もない移住、これに伴う不安と恐怖に満ちた心境こそ筆舌では尽し得ないのが恨みである。こうして全国にまだ例を見ない移住史の記録を残してわが郷土四徳は消え去った。

古人の諺に「人間到る所に青山あり」とか誠実勤勉で素直で努力をおしまずに働く事を約束するなら、必ず楽土の上で生活してゆく事が出来るに違いないと、かたく信じて新天地を求めた。さいわい、大部分の者は母村の周辺にそれぞれ居を求めて、生活に取り組んで懸命に働くとともに災害でたおれた方々の冥福を祈っておる事であろう。

現実には災害移住であるが、やがては村外発展史の1ページともなることを思って、母村の名を汚さぬよう努力している。

あ と が き

昭和 36 年 6 月、史上はじめてといわれる大災害が、わが中川村を襲ってから満 3 年余り、その災害の状況、復興の姿を一応まとめてみたが、記事も、写真も、全村にわたって、洩れなく採録し、かつ正確妥当に記述することのできなかったことをお詫びする。

しかし、この災害誌を、できれば各戸 1 本を備え、村民の皆さんの災害記録として、また子弟の教材として、永く世に伝え記念として残されるよう切望する。

ものの価値と必要性は、何十年何百年の後にあって生じてくる場合が非常に多い。本村過去何百年かの歴史において、正徳のひつじ満水をはじめ、何十回あったであろう災害記録、古文獻が、残念ながら、殆ど発見されていない。ただ「理平堤防」に代表される、天竜川、前沢川の水防については比較的くわしく記録が保存されているのと、享保 16 年の 5 月と 8 月に洪水

があって、流失 11 戸半壊 5 戸の被害が葛島方面にあり、これが堤防復旧工事訴願文書の中にかがわれるにすぎない。大正 12 年 6 月、前沢川、四徳川の氾濫、災害の状況も、当時、これに直面した人々を除いては、やがて忘れられてゆくのではあるまいか。「災害は、忘れたところにやってくる。」という箴言(しんげん)もこうした消息の間に生れたのであろう。

このたび、災害復興記念式典にあたって、遠いむかしから、郷土を襲った災害を、このたびの大災害と合わせ考え、その教訓を心にのこして郷土建設に邁進したいものである。

刊行にあたって、資料、写真等各方面から提供いただき、また転載、掲載を快よく御許し下さった方々に深謝する。

なほ本誌の執筆編集は、村から委嘱した下平加賀雄氏と主事林常登を中心に、助役、上山実也、教育長、寺平勇一、総務課長、平沢善吉、建設課長、井沢大蔵、がそれぞれ分担執筆し、また編集に当った。

昭和 39 年 11 月

総務課長 平 沢 善 吉

昭和 39 年 11 月 10 日 印 刷

昭和 39 年 11 月 14 日 発 行

中 川 村 の 災 害 誌

— 36.6 梅雨前線豪雨 —

編集兼発行人

長野県上伊那郡
中 川 村 役 場

印 刷 所

長野県岡谷市川岸 108
中央印刷株式会社